

英検

英語情報

2018
春号
SPRING

小・中・高・大を連携し、すべての英語教育の"今"を知る。

CLASS REPORT

大分県立杵築高等学校
岩手県 遠野市立遠野中学校
東京都 大田区立洗足池小学校

明日から使える! 英語で授業 7つの鉄則

〈特別編〉安河内先生の「4技能+文法・語彙指導における鉄則」

高大接続改革ニュース

大学入学共通テストに向けて 試行調査(プレテスト)の結果から見たこと

EVENT REPORT

英語教育セミナー in 東京 2017

新学習指導要領がめざす

英語教育とは

前 文部科学省初等中等教育局 平木 裕 視学官
文部科学省初等中等教育局 下山 芳子 教科調査官



明日から使える!

授業のテクニックを
動画で見られる!



英語
情報

『英語情報』専用アプリで
写真をかざすだけ!

※詳しくは表紙裏面で!

小・中・高・大の英語教育の“今”を 『英語情報』がお伝えします。

新学習指導要領の全面実施に向けて、
これまで以上に、児童生徒主体の言語活動を中心とした授業が求められ、
小・中・高・大をつないだ英語教育改革が進行しています。
『英語情報』では、国の動向から小・中・高の授業改善の取り組み、
大学の入試改革やグローバル化まで、英語教育の最新事情をお届けします。
明日からの授業づくりや指導にどうぞお役立てください。

Information

「英語で授業ができるか不安」「言語活動の具体例が知りたい」
そんな先生方のために

『英語情報 AR』アプリで 誌面で紹介した授業の 動画を視聴できます。



NEWS 再生期限切れになった過去の動画も見られるようになりました！

STEP 1 アプリをダウンロードします。(無料)
(iOS/Android 対応)

スマートフォンかタブレットを用意して、

 または  から「**英語情報 AR**」と検索し、ダウンロードします。

STEP 2 アプリを起動し、画像をスキャンします。

本誌記事中の **AR** マークの付いた画像が **枠内に収まるようにスキャン** します。



STEP 3 動画が再生されます。

「スキャン完了」と表示されると、動画が始まります。

一度スキャンした動画は「履歴」をタップすれば、いつでも動画をご覧いただけます。

※ iPhone/iPad → iOS 7.0 以上、
Android → ver. 4.0 以上。

Android 版は一部対応していない端末がございます。
インストール画面の動作確認端末をご確認ください。

※ カメラのピントが合わなかったり、光が反射したりすると、読み込みができない場合があります。
※ 読み込まない時は、カメラ位置を少し上下させて読み込み距離を調整してください。
※ 読み取りに時間がかかる場合はアプリを再起動し、再スキャンをしてください。
※ 動画の再生にはネットワーク環境が必要です。Wi-Fi、または LTE 環境を推奨しています。

英語情報 2018 春号 CONTENTS



10



12



14



20

02 最新情報

AR 02 NEWS & TOPICS

04 特集

04 「授業改善を考える」

新学習指導要領がめざす 英語教育とは

前 文部科学省初等中等教育局 視学官 平木 裕
文部科学省初等中等教育局 教科調査官 下山田 芳子

AR 10 CLASS REPORT

(高等学校編)

ミニ・ディスカッションを取り入れた
思考力・判断力・表現力を育む指導

大分県立杵築高等学校 教諭 三浦 宏昭

AR 12

(中学校編)

ふるさとの魅力を理解し
英語で発信できる生徒を育てる

岩手県 遠野市立遠野中学校 教諭 浅沼 美紀子

AR 14

(小学校編)

子供たちのやってみたい思いを大切に
コミュニケーションの素地を育てる授業づくり

東京都 大田区立洗足池小学校 教諭 黒木 愛

16 授業改善

16 (連載)【第1回】

中学校・高等学校の

授業改善と評価のあり方

明海大学 教職課程 准教授 百瀬 美帆

18 (連載)【第1回】

小学校外国語活動・外国語科の

授業で使える「評価」のためのアイデア

愛知県立大学 外国語学部 准教授 池田 周

AR 20

(連載)【第15回】安河内 哲也先生が聞く

明日から使える! 英語で授業 7つの鉄則

〈特別編〉4 技能+文法・語彙指導における鉄則

24 (リレー連載) 新学習指導要領に向けて

(高等学校編)【第1回】

生徒の主体的な学び、自律的な学習をめざして

茨城県立取手第一高等学校 教諭 花沢 典行

(中学校編)【第1回】

書かなくても伸びる?!

岩手県 一関市立千厩中学校 教諭 右京 久里子

(小学校編)【第1回】

「もっと知りたい!」「もっと伝えたい!」という気持ちに
火を付ける授業づくり

東京都 狛江市立緑野小学校 教諭 今西 佑

30 高大接続改革を見据えて

30 (高大接続改革ニュース)

大学入学共通テストに向けて

試行調査(プレテスト)の結果から見えたこと

独立行政法人大学入試センター 審議役 大杉 住子

34 TEAP Hot News!

・2018 年度 TEAP および TEAP CBT
試験日程と試験概要を公開

・TEAP「団体専用クーポン利用型申込」
のご案内

36 指導のヒント

AR 36 (連載)【第1回】

英検 2 級・準 2 級・3 級

ライティングテストを活用した
発信力の育成

Write more. Write well. Write it right!

清泉女子大学 文学部 英語英文学科 教授 大井 恭子

38 Pick Up! 英語教育

38 (EVENT REPORT)

「英語教育セミナー in 東京 2017」を開催

40 英語教育セミナー in 東京 2017・パネルディスカッション

上智大学 言語教育研究センター長 特別招聘教授 吉田 研作

名古屋外国語大学 外国語学部英語教育学科長 教授 太田 光春

明海大学 副学長 高野 敬三

一般財団法人 実用英語推進機構 代表理事 安河内 哲也

42 (特別記事)

東京都教育委員会が

「東京グローバル人材育成計画 '20」を発表

AR 46

(わが町の英語教育事情) 宮崎県

専門学科の生徒たちが
学びの成果を英語で発表

「第3回 宮崎県高等学校英語プレゼンテーションコンテスト」を開催

48 (わが町の英語教育事情) 茨城県笠間市

「ABC 笠間プロジェクト」のもとで
英語教育を推進

52 教員研修

52 (2017 年度 英検 英語教員海外研修 帰国後の取り組み)

小学校プログラム参加者
実践報告会を開催

54 『英語情報』オスズメ本

NEWS & TOPICS

英語学習指導などに役立つ最新情報をお届けします

NEWS

「大学入試英語成績提供システム」参加要件 確認結果を受けて

2020年度から始まる「大学入学共通テスト」における英語の試験について、文部科学省は「4技能評価を導入し、外部の資格・検定試験を活用する」として、「大学入試英語成績提供システム」（成績提供システム）への参加要件を満たすことが確認された資格・検定試験の活用を発表しています。公益財団法人 日本英語検定協会（英検協会）は2017年12月、成績提供システムへの参加申請を行っておりました。このたび、独立行政法人大学入試センター（センター）より成績提供システムの参加要件確認結果が公表されましたのでお知らせいたします。

1. 確認結果について

英検協会では、成績提供システムに、実用英語技能検定（従来型、公開会場実施、1日完結型、英検 CBT）^{*}、TEAP、TEAP CBT、IELTS（Academic Module（ブリティッシュ・カウンシルと共同運営））を参加申請しておりました。なお、実用英語技能検定の従来型においては、本会場を前提とした実施運営方式を申請しておりました。センターによる参加要件確認結果は次の通りです。

※従来型以外はいずれも仮称

◆参加要件を満たすと確認された試験

実用英語技能検定（公開会場実施、1日完結型、英検 CBT）、TEAP、TEAP CBT、IELTS（Academic Module）

◆参加要件を満たしていると確認されなかった試験

実用英語技能検定（従来型）

理由：一次試験の合格者のみが二次試験を受験できる仕組みとなっており、一次試験不合格者は二次試験を受験できないことから、参加要件第4の3を満たしていると確認することはできない。

2. 成績提供システムでご活用いただける実用英語技能検定の方式について

英検協会では従来型の実用英語技能検定に加え、新たな試験方式として、2018年度より英検 CBT、2019年度より公開会場実施、1日完結型を実施いたします。2020年度開始の成績提供システムでご活用いただけるのは、高校3年生の4月から12月までの期間に2回までご受験いただく英検 CBT、公開会場実施、1日完結型となります。

新方式に関する最新情報は随時、英検ウェブサイトにて公開してまいります。なお、参加要件確認結果に関する詳細につきましても、英検協会ウェブサイトにて公開しておりますので、ぜひご覧ください。

英検協会は公益財団法人として、今後も実用英語の普及・促進、英語力向上の目的のもと、皆様のご要望に応じた、より良い試験の実施・運営をめざしてまいります。また、大学入試における外部資格・検定試験の活用の広がりを受け、より多くの受験生の皆様にご利用いただけますよう、受験機会の拡大や実施・運営体制の強化・改善に努めてまいります。英検協会ならびに各種検定試験へのご理解のほど、お願い申し上げます。

NEWS

英検 CBTの特設ウェブサイトを公開

英検 CBTは、4技能を1日で測定し、コンピュータによる受験を可能にした試験です。2018年8月より毎月実施し、2級・準2級に加え、新たに3級も導入されることになりました。問題は通常の英検と同じ形式で、級の可否認定と技能別スコアも表示されます。通常の英検と併せて受験し、大学入試や高校入試にぜひご利用ください。英検協会では、英検 CBTの特長を紹介する特設ウェブサイトを公開いたしました。試験のポイントを分かりやすく解説する動画もご視聴いただけます。なお、英検 CBTに関する最新情報は随時、ウェブサイトにて公開しますので、ぜひご覧ください。



英検 CBT

検索

今後の実用英語技能検定（英検）の試験概要

	従来型	公開会場実施（仮称）	1日完結型（仮称）	英検 CBT（仮称）
Reading Writing Listening (一次)	1～3級 年齢制限なし PBT	1～3級 高校3年 PBT	準1～3級 高校3年 PBT	2～3級 年齢制限なし CBT
	合格者のみ (別日)	全員 (別日)	全員 (同日)	全員 (同日)
Speaking (二次)	対面式 	対面式 	録音式 	録音式

実施開始			1963年	2019年度より実施予定	2019年度より実施予定	2018年8月より毎月実施予定
会場数			本会場 約400会場 準会場 約1万7,000会場	本会場 約400会場で実施 ※実施委員・教室監督責任者派遣の準会場でも実施	47都道府県に会場設置 ※今後順次拡大を検討	大都市19会場で実施 ※今後順次拡大を検討
受験日数			2日	2日	1日	1日
大学入試での利用	現行	AO入試	○	○	○	○
		推薦入試	○	○	○	○
		一般入試	○	○	○	○
		一般入試 (センター試験利用)	○	○	○	○
	2020年度以降	総合型選抜	○	○	○	○
		学校推薦型選抜	○	○	○	○
		一般選抜	○	○	○	○
		一般選抜 (大学入学共通テスト利用)	×	○	○	○

・対象が「高校3年」と書かれている箇所は、基本的に浪人生も同様に念頭に置いておりますが、今後センターから公開される浪人生の取り扱いの方針に従って検討を進めたいと考えます。

・上記表は成績提供システムへの申請書類をベースにまとめております。現段階での予定ですので、検定料も含めて今後変更の可能性がございます。

TOPICS

研修参加者有志による 「第1回 連絡協議会」を開催

全英連・英検協会共催「中高英語教員向け国内研修」および、英検協会主催「英語教員海外研修」に参加された先生の有志10名が全国各地から集まり、2018年2月3日に「第1回連絡協議会」を開催しました。この会は、先生同士の広域ネットワークの構築や、授業改善に向けた模擬授業、実践報告などの研修機会を設けることを目的として発足しました。研修参加者の有志によって発足した会ですが、「もっと勉強したい!」「他地域の先生とつながりたい!」という先生方は、一緒に会を盛り上げていただければと思います。連絡協議会の開催情報や詳細は『英語情報 2018夏号』にてご紹介いたします。

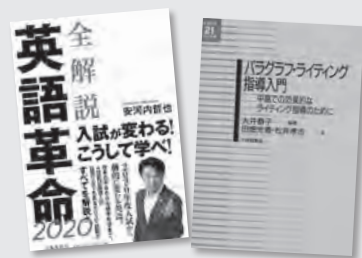


PRESENT!

英語教育関連書籍を プレゼント!

英語教育に関する書籍を、読者の皆様に抽選でプレゼントいたします。本誌に関するアンケートにお答えいただき、ご希望の書籍番号をご明記のうえ、『英語情報』編集部までご応募ください。

詳細はP.54を
ご参照ください。



新学習指導要領がめざす教育とは

学習指導要領は、時代の変化や子供たちの状況、社会の要請等を踏まえ、おおよそ10年ごとに改訂されてきた。小・中学校の新学習指導要領はすでに2017年3月に告示されており、今年度から移行期間に入る。高等学校については、現在改訂が進んでおり、来年度から移行期間に入る予定だ。現行の学習指導要領において重視された、学力の3要素のバランスの取れた育成、言語活動や体験活動の重視等については、新学習指導要領でも引き続き充実を図ることとされる。

今回の改訂のポイントは、「育成をめざす資質・能力」を3つの柱（①知識及び技能、②思考力、判断力、表現力等、③学びに向かう力、人間性等）で示し、教育課程全体や各教科等の学びを通じて「何ができるようになるのか」という観点で整理したことにある。そして、どの教科等においても「主体的・対話的で深い学び」の実現をめざし、授業を工夫・改善する必要があることがうたわれている。

平木裕視学官は「外国語教育においては、小・中・高等学校が一貫して、コミュニケーションの目的や場面、状況などを明確にすることが重要であり、児童生徒同士のインタラクションを大切に言語活動を中心に授業を行うことを求めています。基本的には現行の学習指導要領でのスタンスを引き継いだものです」と話す。

新学習指導要領のもとでは、小・中・高等学校のいずれにおいても、外国語は「聞くこと」「読むこと」「話すこと[やり取り]」「話すこと[発表]」「書くこと」の5領域別に、「できるようになること」を示した目標が設定された。「話すこと」を[やり取り]と[発表]に分けたことについて、平木視学官は、「日常生活に照らせば、話すことは一方向であったり双方向であったりしますし、それぞれの特性が異なりますので、実際のコミュニケーションを考えたら、むしろそれは自然なことと言えます。また、CEFR（ヨーロッパ言語共通参照枠）でも「話すこと」は[やり取り]と[発表]に分かれており、それとの整合性を取っています」と説明する。

外国語教育の充実

「外国語を使って何ができるようになるか」

▶ 5つの領域別の目標を
学習指導要領に設定

小・中・高等学校を
通じて！

「聞くこと」
「読むこと」
「話すこと[発表]」
「話すこと[やり取り]」
「書くこと」

中央教育審議会「答申」（2016年12月21日）
「第2部 各学校段階、各教科等における改訂の具体的な方向性」より

改訂が進んでいる高等学校の学習指導要領についても、その方向性は基本的に小・中学校と同じであり、「何ができるようになるのか」という目標のもとで指導を行うことになる。

下山田芳子教科調査官は「高等学校の先生方には、生徒が小学校中学年の「外国語活動」で慣れ親しみ、高学年の「外国語」や、中学校で学習したことを高等学校へつなげていくということを、これまで以上に意識していただく必要があると思います。また、現行の学習指導要領で示された『授業は英語で行うことを基本とする』については引き継がれますが、新学習指導要領では中学校でも同様になりますので、高等学校では一層、中学校とのつながりを意識した授業づくりを考えることが求められます」と話す。

高等学校では、科目名も変わる。「コミュニケーション英語」は「英語コミュニケーション」に、「英語表現」は「論理・表現」となる。いずれも英語で聞いたり読んだりしたことを基に、話したり書いたりする、という統合的な言語活動を通じて、それぞれの領域の能力をさらに伸ばしていくことになる。

高等学校学習指導要領の改訂のポイント

外国語教育の充実

- 統合的な言語活動を通して「聞くこと」「読むこと」「話すこと[やり取り・発表]」「書くこと」の力をバランスよく育成するための科目（「英語コミュニケーションⅠ、Ⅱ、Ⅲ」）や、発信力の強化に特化した科目を新設（「論理・表現Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ」）
- 小・中・高等学校一貫した学びを重視して外国語能力の向上を図る目標を設定し、目的や場面、状況などに応じて外国語でコミュニケーションを図る力を着実に育成

高等学校の科目

（現行） 外国語

「コミュニケーション英語基礎」
「コミュニケーション英語Ⅰ」
「コミュニケーション英語Ⅱ」
「コミュニケーション英語Ⅲ」
「英語表現Ⅰ」
「英語表現Ⅱ」
「英会話」

（改訂案） 外国語

「英語コミュニケーションⅠ」
「英語コミュニケーションⅡ」
「英語コミュニケーションⅢ」
「論理・表現Ⅰ」
「論理・表現Ⅱ」
「論理・表現Ⅲ」

英語教育とは

新学習指導要領がめざす

特集「授業改善を考える」

2017年3月に告示された小・中学校の新学習指導要領は、今年度から移行期間に入り、小学校では2020年度から、中学校では2021年度から全面实施となる。また、高等学校の学習指導要領改訂も進んでおり、2019年度からの移行期間を経て、2022年度より年次進行で実施される。「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善が求められるなかで、めざすべき英語教育の方向性について、文部科学省初等中等教育局の平木裕視学官と下山田芳子教科調査官にお話を伺った。

※文中の肩書き等は取材当時のものです。

新学習指導要領がめざす教育とは

実際に、児童生徒が自ら言語活動を行わない限り、英語力やコミュニケーション能力は身に付かない。そのためには、教員が教え込むのではなく、児童生徒がコミュニケーションのなかで英語を使う経験をより多くもたなければならない。

「児童生徒が自分の考えや気持ちを、お互いに伝え合うことを基本に据えた言語活動にしていくことが必要です」と平木視学官。中学校では現行学習指導要領においてもすでに、英語で行っている授業が多く、「先生方がコミュニケーションのために英語を使い、生徒のなかにも英語をコミュニケーションのツールとして使いたい、という思いが強くなってきているのは紛れもない事実」と示しながらも、児童生徒が即興でやり取りをする力や、インタラクションを重視した言語活動の実践はまだ十分ではないという。「言語活動を、繰り返し練習するドリル的な活動として捉えて実践されている例が多く見受けられます。実際のコミュニケーションのなかで児童生徒が英語を使って活動をする

学習到達目標に照らした指導と評価の一体化を

現在、学習指導要領の改訂と同時に進んでいるのが、「高大接続改革」だ。文部科学省は、高等学校教育、大学教育、大学入学者選抜を通じて、「学力の3要素」を確実に育成し、評価する三者の一体的な改革を進めることが重要であるとしている。

下山田教科調査官は「先生方には、『入試が変わるから授業を変えなければ』と焦る必要はないことをご理解いただきたい」と思います。『新学習指導要領に沿った授業を通して育成した資質・能力が、大学入試で評価される』ように、入試を改革しているのであり、新入試のために授業を変える必要はないのです。高等学校の先生方には新学習指導要領をしっかりと読んでいただき、新入試でも求められることになる資質・能力を理解していただければと思います」と強調する。

学習指導要領が変わり、授業が変わる。授業が変われば、評価も変わる。授業づくりにおいては、学習到達目標に照らした指導と評価の一体化を図ることが求められる。大学入試はその延

ことができるような授業改善が望まれます」と述べる。

高等学校においては、CAN-DOリストの作成が進みながらも、指導計画への関連付けがまだ薄いという課題がある。下山田教科調査官は、高等学校卒業時までには生徒が「何ができるようになるか」を意識せずに授業がつくられているため、CAN-DOリストと連動していない授業になっていると指摘する。そして、高等学校の授業改善が進まない理由の1つに、大学入試で必要な知識を、受験時までにはどれだけ身に付けることができるか、という視点で指導計画が立てられる傾向があることを挙げた。「いわゆる“受験英語”と呼ばれている単語や文法の知識の教え込みに終始している授業もまだ見られます。そのような知識中心の構成になっている教科書の問題もありますが、授業を通して、生徒が卒業までにはどのような『知識及び技能』を身に付け、それを活用して『何ができるようになるのか』を設定したうえで指導することが重要です」と強調した。

長線上にある。

「最終的には自律的な学習者を育てることが目標ですから、児童生徒が、自分は何ができるようになったのかを認識できるような評価をしていくことが必要でしょう。ぜひ、CAN-DOリストを授業と関連付け、指導と評価の一体化を進めていただきたいと思います」と下山田教科調査官は望む。

また、平木視学官は「評価については、現在中教審で検討を始めているところですが、授業で話すことや書くことに関わる目標を掲げて言語活動に取り組んだのであれば、パフォーマンステストを通じて評価する必要があるでしょう。評価の際には、児童生徒が、自分ができるようになったことを実感でき、次への意欲が高まるようであってほしいと思います。小学校の外国語活動で成果が上がっているように、ぜひ、中・高等学校でも生徒と向き合い、英語が好きになるような授業改善と評価を進めてください」と述べた。

「チーム学校」として連携を大切に

今回の学習指導要領改訂では、「カリキュラム・マネジメント」にも注目が集まる。求められる資質・能力を育成するためには、各教科等の学習とともに、教科横断的な視点で学習を成り立たせることが課題となる。そのため、「カリキュラム・マネジメント」を導入し、各教科等の教育内容を相互に捉え、必要な教育内容を組織的に配列し、教育課程全体と各教科等の内容を往還させることが必要となる。また、各校において児童生徒や地域の実情を踏まえ、効果的な年間指導計画のあり方や、授業時間・週日程のあり方などについて、校内研修等を通じて研究を重ねていくことになる。

平木視学官は『「チーム学校」として、各教科等の教育全体をどのように捉え、授業改善を進めるのかを考える必要があります。英語科教員同士、他教科等との連携、学年間など、縦横両方向から一体となって改善に取り組んでいくことで、効率的な指導体制が築けると思います。評価を行うにしても、評価方法や評価基準などは教員同士だけでなく、児童生徒とも共有すべきであり、学校全体でどのように児童生徒を育てていくのかということを考えるとよいでしょう」と話す。

また、学校内の連携体制づくりだけでなく、地域における小・中・高等学校の連携も今後はさらに重要となる。それについて、平木視学官は「小学校の外国語科を指導するには、その前にある外国語活動を知っておかなければなりませんし、中学校の先生は小学校の外国語科、外国語活動を知る必要があります。高等学校の先生は、中学校だけでなく、小学校のことも把

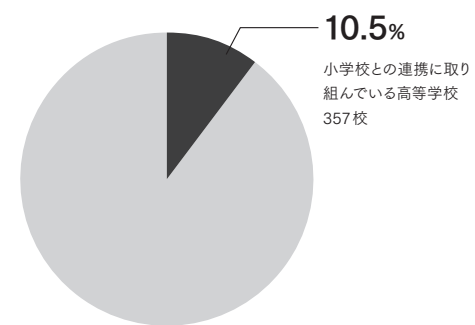


握したうえで、生徒を迎え入れることになります。一貫した外国語教育を推進していくには、小・中・高等学校の連携が重要なのです」と述べた。

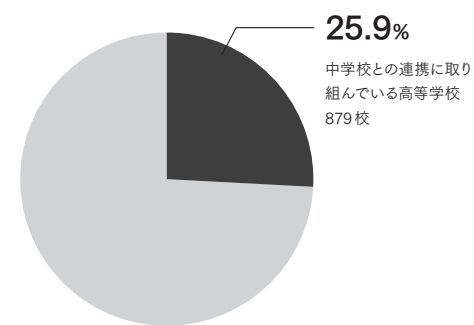
だが、小・中学校の場合は設置者が同じでも、高等学校は異なる場合が多いため、連携が取りづらいという課題もある。それを踏まえ、最近では全国的に、各都道府県教育委員会が、小・中・高等学校合同の協議会を開催したり、校種を超えた授業観察をしたりするなど、小・中・高等学校をつなぐ動きが見られる。

下山田教科調査官は「特に、高等学校の先生は入口の改革（小学校における外国語教育の早期化と教科化）と出口の改革（高大接続改革）があるなかで、出口だけを見据えるのではなく、小学校からどのように英語を学んできているのかという実態を見ておかなければ、出口のイメージがつかみづらいのではないのでしょうか。入口でめざしたものと、出口ででき上がったものが合わないということがあってはなりません。そのような意味では、高等学校の先生方はこれまで以上に全体を見通して指導していく必要があります」と考えている。

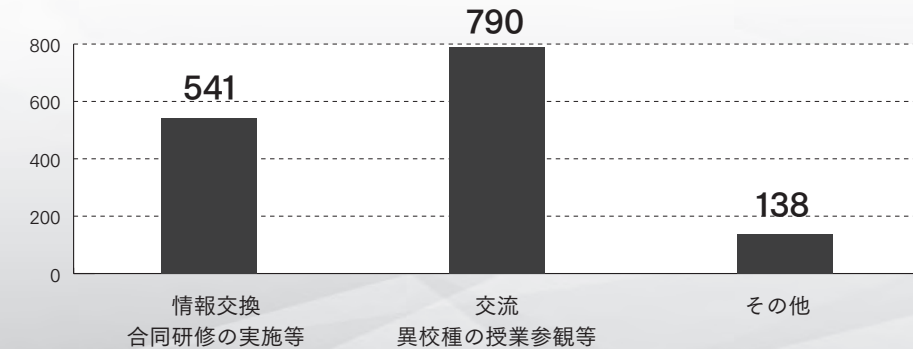
小学校との連携に取り組んでいる高等学校



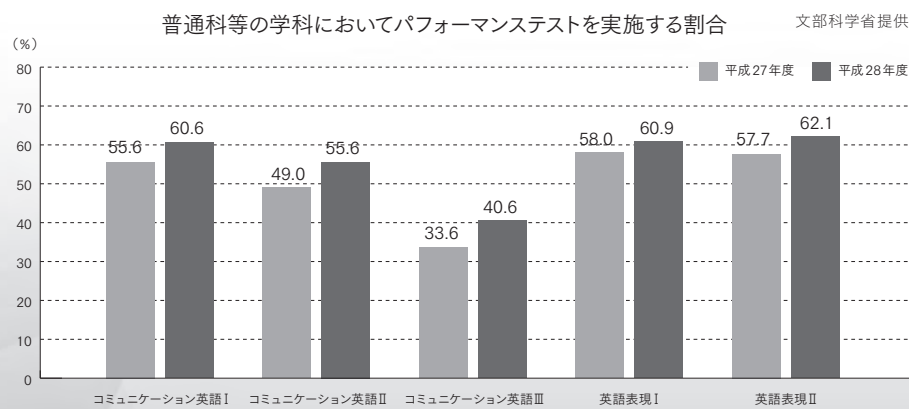
中学校との連携に取り組んでいる高等学校



小・中学校との連携の形態（平成28年度）



文部科学省提供



※この調査結果において、「普通科等の学科」とは、英語教育を主とする学科及び国際関係に関する学科以外の学科（普通科、専門教育を主とする学科及び総合学科）をいう。

他教科等との連携が不可欠

授業改善にいかに取り組むべきか。児童生徒の言語活動中心の授業をいかにつくればよいのか。

「小学校の先生方の授業づくりを、ぜひ中・高等学校の先生方には参考にしてほしい」と平木視学官。「先生がどのように英語を使うか、生徒が英語を使う場面をいかに用意するか、ということ考えたとき、そのヒントは小学校の授業から見つかるかもしれません。小学校の先生の指導力は高く、学級経営の面からも素晴らしい取り組みをされています。小学校の授業は、先生の説明から入らずに、場面から英語を取り入れていくので、理屈なしで児童が英語を使い始めています」と話す。

下山田教科調査官も言葉を添える。「高等学校の先生方は英語力そのものはとても高いのですが、日本語を介在させずに文法的な知識を教えるのは無理、と考えていらっしゃる方がまだ多いのです。しかし、実際に小学校では、全く日本語を使わずに、基本的な文を使って、自分が伝えたいことを表現させる、というような授業が展開されています。高等学校ではこれまで、何を覚えさせるかということが前提になって授業がつくられてきましたが、小学校では児童にどのような場面で、どのようなことを表現させたいのが前提で授業がつくられていますので、ぜひ参考にしてほしいですね」

小学校から中学校、高等学校へと上がるにつれ、扱う題材は自分の身の回りのことから、地域のこと、社会や世界のことへと広がり、内容も高度になる。そうしたなかでの言語活動を充実させていくためには、他教科等との連携は不可欠だ。

平木視学官は「中学校であれば、社会科では世界の地理や歴史、理科であれば環境問題やエネルギー問題などを扱いま

すが、英語の教科書でもそうした内容が題材として扱われています。そこで、社会や理科の授業で学んだことを英語で発信する活動を取り入れることができるでしょう。小学校ではよく算数や図画工作、家庭科などで学習したことを外国語活動に取り入れています。中学校では総合的な学習の時間を活用して、職場体験などのキャリア教育と英語とを関連付けることもできるでしょう。意図的に他教科等と連携することが、言語活動の充実を図るうえで必要だと思います」と考える。

高等学校では、スーパーサイエンスハイスクール（SSH）やスーパーグローバルハイスクール（SGH）においては、生徒が課題研究に取り組み、その成果を英語で発信するといった取り組みがある。「SSHやSGHの研究を周知し、そうした取り組みを各校でも参考にしながら、英語の授業だけで完結しない連携のあり方を考えていきたい」と下山田教科調査官は言う。

教師の英語使用・英語力

生徒の英語による言語活動を
中心に展開する授業

それを教師がどう促すか？
どのように英語を用いるか？

平木 裕（ひらき・ひろし）

文部科学省初等中等教育局視学官、文部科学省初等中等教育局教育課程課及び文部科学省初等中等教育局国際教育課外国語教育推進室教科調査官、国立教育政策研究所教育課程研究センター教育課程調査官・学力調査官を併任。広島県公立高等学校教諭、広島県立教育センター指導主事、広島県教育委員会指導主事を経て、2008年4月に国立教育政策研究所教育課程研究センター教育課程調査官、2017年4月より現職。

下山田 芳子（しもやまだ・よしこ）

文部科学省初等中等教育局教育課程課及び国際教育課外国語教育推進室教科調査官、国立教育政策研究所教育課程センター教育課程調査官を併任。在外教育施設教諭、茨城県公立高等学校教諭、茨城県教育庁高等教育課指導主事、茨城県公立高等学校定時制教頭を経て、2017年4月より現職。

思考力、判断力、表現力を養う言語活動を

新学習指導要領には、教科等別に「解説」が添えられている。現行の学習指導要領解説に比べると、指導手順の例を示すなど、どのような授業をつくればよいかをイメージしやすいような具体的な記述が多くなった。なかでも、領域間を統合した指導の手順が示されているのが特長だ。

平木視学官は、「これまでは事前に書いたものを読む、話すということが一般的でしたが、それでは原稿を読むだけで、自分の言葉で話すことができなくなってしまう。今、求めている授業では、例えば、読んだことについて自分の考えなどを口頭で伝え合い、そのことをもとに、書いてまとめるといった活動になります。そうしたイメージをもてるような解説をまとめました」と説明する。

複数の領域を統合した授業を進めるうえでの具体的な言語活動も明示されている。高等学校の新学習指導要領の「話すこと[やり取り]」では、ディベートやディスカッションといった活動が入る。ただし、ディベートについては、身近な話題に対して、ペアで賛成と反対の立場に分かれて、その理由を伝え合う、というような短い簡単な活動から始めてほしい、と下山田教科調査官は述べる。「必ずしも下調べをして難しい議論を戦わせるということを求めているわけではありません。目の前の生徒の実態に応じて、思考力、判断力、表現力を養う言語活動を取り入れていただければと思います」

ディベートやディスカッションなどの[やり取り]の活動では、単に意見を述べるだけでなく、その意見をもつ理由を論理的に表現することも必要であり、相手が述べている主張を聞き、自分がどのように考えるかといった姿勢で聞くことも求められる。

平木視学官は「中学校はもちろん、小学校でもできる活動だと思います。例えば、地元の美味しい食材を、AさんとBさんがそれぞれ別の物を売り込むという活動で、それを聞いたCさんがどちらがよいかを判断し、必要があれば質問をして情報を得るなどです」と活動例を示す。

英語が好きな児童生徒を育てるために

学習指導要領が変わり、小・中・高等学校での授業が変わり、大学入試や大学教育までが変わる、大きな改革が進んでいる。このような状況を前に、小・中・高等学校の教員はいかに取り組むべきなのか。

下山田教科調査官は「高等学校の先生方は、小・中学校よりひと足早く、『英語の授業は英語で行う』ということに取り組んできました。あれから5年が経ち、そのような授業のあり方は浸透し、授業改善が進んでいます。これは、先生方個人の大きな努力はもちろんのこと、国の施策である英語教育推進

このような活動は、児童生徒が英語を使って自らの考えを伝え、情報をやり取りし、判断するといった力が養われ、説得力のある論理を組み立てていく力も求められる。話したり、聞いたり、考えたりといった統合型の活動になる。

「ペア・ワークでは目の前の相手だけがコミュニケーションの対象になりますが、3、4名でグループを組めば、それぞれに役割ができます。活動に応じて、ペア・ワークがよいのか、グループ・ワークがよいのかを見極めて、特性に合った活動を取り入れていきましょう。ペア・ワークでは、相手が話したことに対してどのように返すか。レスポンスが大事で、相手に質問するという力が身に付くと、やり取りは長く続くようになります。これが話し手に対する配慮です。中学校の新学習指導要領で示されている、聞き手、話し手、読み手、書き手に配慮することがコミュニケーションにつながります」

聞き手は話し手に対して「思い」があるからこそ、質問をしたり、聞き返したり、同意したり、別の質問に切り替えたりしながら、話題を展開していくことができる。相手意識をもってコミュニケーションを行うことを大切にしたい指導が、これからさらに求められる。



ミニ・ディスカッションを取り入れた 思考力・判断力・表現力を育む指導

大分県立杵築高等学校では、2016年度から国立教育政策研究所の「教育課程研究指定校」として、ミニ・ディスカッションを取り入れた指導方法の見直しにより、生徒の英語使用機会が大幅に増えることをねらい、思考力・判断力・表現力の育成をめざしている。教科書の題材を基に、生徒の身近な話題に引き寄せて考えさせるディスカッションに取り組む、三浦宏昭先生の「コミュニケーション英語Ⅱ」の授業を取材した。

【本時の目標】

- ア 誤りを恐れずに積極的に英語でコミュニケーションをとろうとする。
- イ 与えられた表現を用いて自分の意見を理由や具体例とともに述べることができる。
- ウ 江戸時代のリユース・リサイクルについてや、日本のごみ問題の現状を理解することができる。
- エ 環境問題に関する語句を理解することができる。

【教材名】

Lesson 8 「Edo; A Sustainable Society」Part 2
『LANDMARK English Communication II』（啓林館）より
全12時間中5時間目

2. Listening Comprehension

本文Part2の音声聞きながら、各自で前回の概要把握で行ったT / F問題の答えを確認する。聞き終えたあと、全体で確認する。



4. Reading Comprehension②

クラス全体で英問英答の答えと、該当箇所を確認する。模範解答を先生がスクリーンに表示し、押さえるべきポイントを示す。



6. Discussion

まず、ペアで2つのトピックから1つを選んで、自分の意見を理由や具体例とともに述べたあと、話し合った考えを発表し、内容を深める。さらに、リユースやリサイクル率を上げるためにできることをグループで考えて話し合い、全体に共有する。



三浦先生の授業の様子は
こちら



1. Vocabulary check

本課で扱う語句をWord Listを見ながら全体で声に出したあと、覚えているかをペアでチェックし合う。一人が意味を言い、もう一人がその単語を答える。さらに、三浦先生と1対1で同様に確認した。



3. Reading Comprehension①

スクリプトを見ながら、再びPart2の音声を聞く。そのあと、準備してきた英問英答の答えと該当箇所を、与えられた表現を使ってペアで確認し合う。



5. Intake

Part2本文の音声を聞き、全体でChorus readingをする。Read and Look upをしたあと、音声を聞きながらOverlappingに取り組む。さらに、Shadowingへと続き、何度も繰り返し本文に触れる。



7. まとめ

ドイツの例を示しながら、リユースやリサイクル率を日本で高めていくために自分たちにできることを考える。次時までにすべきこととPart2の理解を深めておくことを指示して授業を終えた。

根拠を示して思考を促す発問をする

「生徒には根拠に基づいた意見を述べ、反対意見を述べる場合には提案を示せるような責任感のある人間性を身に付けてほしい」と三浦先生は願い、授業で生徒たちの言語活動を支える。教育課程研究指定校として、大分県立杵築高等学校では2016年度より、「ミニ・ディスカッションを通した思考力・判断力・表現力の育成を重視した指導方法」について研究を進めてきた。

授業の後半で取り組むディスカッションは、前半で繰り返し音声を聞き、声に出して読んで理解した本文内容に関連したトピックにつ

いて、ペアで話し合い、全体に共有し、さらにグループで話し合ったうえで、再び全体に共有しながら思考を深めていく。何人もの生徒に発表させて、多様な意見に触れることで、「自分ならどう考えるか」を表明し、データなどの根拠に裏打ちされた揺るぎない意見を述べるベースをつくる。ディスカッションをする際には、本文の題材をできるだけ自分の身近に引き寄せて、経験に基づいて考えることができるようなトピックが提示される。生徒が意見を発すると、三浦先生はその意見を受け止めたうえで、生徒が答える根拠となるような情報をグラフなどで示し、思考を促す発問をする。

生徒主体の技能統合型で進める授業

三浦先生の授業の前半では語彙指導や、「聞くこと」「読むこと」の活動を通じて、ディスカッションをするためのinputやintakeに取り組む。あくまで、話すことを意識した活動であり、「聞いたり、読んだりしたことを話すことにつなげたい」という技能統合の考えのもとで行っているという。そして、論理的に考えて話すことができるよう、ペアで意見を表明し合うための表現の文例をワークシートに示し、生徒たちは話すときにそれを参考にしながらディスカッションを進める。生徒同士の活動が主となるため、英語が得意な生徒は

苦手な生徒に教えることもあれば、全体発表の際に三浦先生からモデルとなるような生徒の発言を促すこともある。生徒たちは友達の意見に耳を傾け、受け入れようとする姿勢が身に付いており、生徒同士で学び合う関係が築かれている。

生徒の考えや気持ちを引き出す工夫

現在のような授業スタイルを展開するようになったのは、英語教育推進リーダーの中央研修がきっかけだったという三浦先生。「中央研修では、『話すこと』には、スピーチやプレゼンテーションのような『パブリックト

ーク』と、ディスカッションなどの『プライベートトーク』があり、私たちがどちらを多く経験するかといえば、プライベートトークであると学びました。そこで、生徒たちには授業でペアやグループでのディスカッションを経験し、間違いを恐れずに英語を話す機会を多くつくっていきたくて考えています」と話す。生徒たちがディスカッションをしている間も、全体の前で発表しているときも、三浦先生は温かなまなざしで見守り、生徒の考えや気持ちを引き出そうとさまざまな発問をする。そして、その発問を通じて、生徒が教科書の内容を理解できるよう促している。

「社会に出たら、生徒たちは多様な価値観をもつ人たちと協働し、より良い課題改善策を見出していく場面に遭遇するでしょう。その際に、いかに意見を述べるのか。どこに問題があり、どうしたら改善できるのかを考え、判断していく力を身に付けてほしいと思います」と三浦先生は述べた。

技能統合型の授業で育む、生徒の思考力・判断力・表現力。三浦先生は今後もさらにディスカッション活動を充実させ、生徒の英語力を卒業時までにCEFR-JのB2～B1まで引き上げていきたいと考えている。



教科調査官が見る三浦先生の授業

文部科学省 初等中等教育局 教育課程課・国際教育課 下山田 芳子 教科調査官

三浦先生の授業は、「聞くこと」「読むこと」「話すこと」に関するさまざまな活動を織り交ぜ、しかもスピーディーに展開していくので、授業が非常にテンポよく感じられます。先生の話す英語は、決してゆっくりではありませんが、基本的な語彙を多用して的確な表現をしているため分かりやすく、生徒もリラックスして授業に参加しています。また、授業後半で行うディスカッションでは、活動の前に先生がICT機器を上手に活用して、トピックに関する適切な情報や説明を生徒に与え、その後のディスカッションに取り組みやすくな

る工夫をするなど、新学習指導要領の「話すこと[やり取り]」の参考になる指導をしています。しかし、「聞くこと」ではすでに理解している内容を繰り返し聞くだけの活動や、「読むこと」では本文を音読するだけの活動など、目的が明確でない活動もみられました。今後は、ディスカッションと同様、「聞くこと」や「読むこと」においても、目的が明確な活動を増やし、聞いたり読んだりした内容についてペアで話すなどの統合的な活動を充実させ、4技能をさらにバランスよく指導できる授業が実現することを期待しています。



ふるさとの魅力を理解し 英語で発信できる生徒を育てる

国立教育政策研究所の2017～2018年度「教育課程研究指定校」である岩手県遠野市立遠野中学校では、教科書の題材を活用してふるさとの魅力を英語で発信できる生徒を育てようと、自分の考えや気持ちを英語で伝える言語活動に取り組んでいる。「遠野CMを発信しよう!」という学習課題に取り組んだ2年生の授業を訪ね、英語教育推進リーダーでもある浅沼美紀子先生にお話を伺った。



前視学官が見る浅沼先生の授業

前 文部科学省 初等中等教育局 平木 裕 視学官（前 文部科学省 初等中等教育局 教育課程課・国際教育課 教科調査官 併任）

遠野市立遠野中学校は、昨年度から2年間の研究（国立教育政策研究所指定）に取り組んでおり、「教科書の題材内容を活用してふるさとの魅力を発信する活動の工夫」にその特徴があります。本時の授業も、「遠野CMを発信しよう」を学習課題に掲げ、浅沼先生も生徒も、英語をふんだんに使っている姿が印象的でした。浅沼先生の“Let's send the Tono CM to the world!”という言葉が、生徒の表現意欲を高めていると言えます。

プレゼンテーション形式でペアごとにCMを「発表」したわけですが、発表して終わり、ではなく、聞く側の生徒から質問やコメントを出

させていた点もポイントです。つまり、発表する（＝情報を共有する）ことに意味をもたせるための「やり取り」であり、発表をスタートとして新たなコミュニケーションを展開できる可能性があります。こうした言語活動では、新学習指導要領で強調している「コミュニケーションを行う目的や場面、状況など」に留意し、聞く側の生徒はどのような状況（立場）で聞いているのかを明確にするとともに、小学校の新教科「外国語」が求めている「その場で質問をしたり質問に答えたり」することが、中学校での即興のやり取りにつながることに留意したいところですね。

【本時の目標】

遠野CMを発信しよう!

【教材名】

My Project 6「CMを作ろうーこんなものがほしい」『SUNSHINE ENGLISH COURSE 2』（開隆堂出版）より
全4時間中4時間目

2. 学習課題の設定～ペアで確認

「遠野CMを発信しよう!」を本時の学習課題とすることが提示される。浅沼先生は“Let's send the Tono CM to the world!”と投げ掛け、生徒たちは前時に作ったCMのスキットをペアで5分間練習した。



4. 発表会

ペアごとに教壇に立ってCMを発表する。生徒たちはジェスチャーなども交えながら、遠野の特色ある場所や食べ物などを次々と紹介した。発表を聞いた生徒たちは質問や感想を述べた。



浅沼先生の
授業の様子は
こちら



1. あいさつ～帯活動

ペアで「遠野」について、40秒間会話する。一人は訪問者として“Where is your favorite place in Tono?”と質問し、もう一人は遠野中学校の生徒役として、自分のお気に入りの場所を紹介しながら会話を続ける。

遠野の魅力を知り、発信する

遠野市立遠野中学校は、教育指針の「ふるさとに学び、ふるさとを語れる遠野人の育成」に基づいて、教科や学校行事などで、地域と連携した活動を行っている。浅沼先生は、「遠野で生まれ育った生徒たちは、目の前にある町の魅力に気付いておらず、この1年間の学習を通じて、あらためて観光名所や名産品などを知り、自分が住む地域を誇りに思うようになってきました」と話す。2年生では、折りに触れ、教科書の各単元の題材と地域を結び付けた言語活動に取り組んできた。扱ったのは、遠野に関するチャリティーポスター、夢の学校、観光地紹介、職場体験、夢、

といった題材だ。この日の授業で学習課題とした「遠野CMを発信しよう!」は、事前に国語科とも連携して地域の良さを学んでおり、それを基に、生徒たちは自分の言葉でスキットを作った。

新学習指導要領を見据えた言語活動

この日の授業は、生徒が自分たちで考えたCMを発表するだけでなく、発表を聞いた生徒がコメントをするという場も設けられた。新学習指導要領で求められる「話すこと[やり取り]」も意識した活動だ。

浅沼先生によれば、発表に対してコメントする活動は今回が初めてだという。生徒たち

はコメントの表現文例から、発表内容に合いそうなコメントを選んで、発表者をたたえた。

日頃から同校の研究に指導助言している、岩手県教育委員会の佐々木淳一主任指導主事（右写真）は授業を参観し、「発表を聞いた生徒が質問し、発表した生徒が答えるには、即興のやり取りの力が求められます。今日はまだ表現例から選んで発言していましたが、生徒がコメントすることを意識して発表を聞くようになれば、聞く態度も養われます。今日をきっかけに、生徒の即興でのやり



取りの力や、聞く態度を伸ばしていったほしいと思います」と述べた。

取りの力や、聞く態度を伸ばしていったほしいと思います」と述べた。

生徒と一緒に楽しみながら授業をつくる

授業では、教室内でクラスの友達に向けてCMを発信したが、「今後は観光協会や地元テレビ局などと連携し、実際におすすめの場所を訪れて動画CMを撮影して、ホームページで発信することも視野に入れたい」と、浅沼先生と佐々木主任指導主事は意欲を見せる。そして浅沼先生は、「総合的な学習の時間に生徒たちは地域の人々と交流をもち、地域の役に立つ活動に取り組んでいます。その際に、CM制作と関連付けて活動が広がれ

ばいいですね」と話した。ホームページ上でCMを公開して、実際に世界とつながることができれば、生徒の海外への興味や英語学習への意欲はさらに高まる。

「活動を充実させるには、コミュニケーションの目的や場面を明確に設定することが重要です」と佐々木主任指導主事。生徒には「ふるさとの魅力」という発信すべきことがあり、英語を使ってそれを発信できるようになってほしいと考える。「浅沼先生の授業では、生徒が教科書で覚えた表現を実際に使って、自分の考えや気持ちを伝える活動の工夫がされています。遠野中学校の研究をモデルとして県内に共有し、地域の特性を生

かした学習を各校で進めていくことをめざしています。浅沼先生には、英語教育推進リーダーとして、県内の英語科教員のロールモデルであってほしいですね」と期待を寄せた。

浅沼先生が大切にしているのは、生徒が安心して英語を使って、質問や発言ができる空気を教室につくることだ。授業では、シンプルな分かりやすい英語で指示を出し、生徒同士の活動を多くし、飽きさせない工夫がある。

「私自身が楽しいことが好きなので、生徒と一緒に楽しみながら授業を進めています。生徒が英語を使って、地域の良さを発信できる力を付けるためにも、さらなる授業改善に取り組んでいきます」と浅沼先生は笑顔で語った。

子供たちのやってみたい思いを大切に コミュニケーションの素地を育てる授業づくり

東京都大田区立洗足池小学校では、2014年度より校内研究の研究主題を「外国語に親しみ、進んでコミュニケーションを図ろうとする児童の育成」とし、2017年度は各学年年間7回の研究授業をはじめ、小・中連携や東京工業大学の留学生との交流を進めるなど、児童の「主体的・対話的で深い学びの実現」に向けた活動に全校体制で取り組んできた。新学習指導要領を見据え、移行期間に使用する新教材『We Can! 2』による6年生担任の黒木愛先生の授業を訪ねた。



教科調査官が見る黒木先生の授業

文部科学省 初等中等教育局 国際教育課 外国語教育推進室 直山 木綿子 教科調査官

映像のなかの子供たちが、とにかくよく話していることが印象的です。オリンピック・パラリンピックを題材にした『We Can! 2』Unit 6では、単元終末に、子供たちが観戦したい競技について観戦計画を立てる活動を設定しています。黒木先生の授業では、そのゴールに向けて、子供たちが相手を替えて、繰り返し“What do you want to watch?” “I want to watch ...”などを使って表現しています。子供たちは対話しながら、友達の良いところを見つけて、それを自身の発話に取り入れては、また別の相

手とやり取りをします。そのため、対話がどんどん長続きし、さまざまなリアクションが教室のあちこちから聞こえてきています。子供たちは、対話を繰り返すなかで、自身が言えるようになっていくこと、工夫をしていることに面白さを見つけているようです。新学習指導要領では、このように自分の気持ちや考えを表現する言語活動を通して、コミュニケーション能力の基礎となる資質・能力を養うことを、高学年外国語科の目標としています。

【本時のめあて】

他者に配慮しながら、オリンピック・パラリンピックで観たい競技とその理由などについて伝え合おう

【教材名】

新学習指導要領対応小学校外国語教材『We Can! 2』
Unit 6 : What do you want to watch?
全7時間中6時間目

2. Warm-Up (Small Talk)

東京オリンピック・パラリンピックを題材としたSmall Talkに続いて、“What do you want to do in 2020?”についてペアでやり取りする。



4. Activity 1 (表現に慣れ親しむ)

“Are you good at ...?” “Yes, I am. I'm good at ...”を使って、相手の得意な競技を聞く表現に慣れ親しむ。



6. Activity 2

“What sport do you want to watch?”や“Why?”といった表現を使い、観戦したいスポーツとその理由を尋ねることで、自分の考えや気持ちを入れて答えることを意識して、楽しみながら会話を続ける。



黒木先生の
授業の様子は
こちら



1. Greeting (あいさつ・本時のめあてと流れの確認)

あいさつに始まり、日付や曜日、天気についてやり取りしたあと、「今日のめあて」を声に出して確認。新たに加わった「他者に配慮しながら」とはどういうことかを考えさせる。授業の流れも合わせて確認した。



3. Warm Up (Let's Chant)

新教材より、チャンツ “Do you want to watch a baseball game?” で、児童は隣同士で向き合い、歌に乗せてジェスチャーを交えながらフレーズに慣れ親しむ。黒木先生の「もっと大きな声で、笑顔で!」に反応して、児童も2回目は元気に笑顔で楽しんだ。



5. Activity 1 (やり取り)

慣れ親しんだ競技名やフレーズを使って、実際に友達とやり取りをする。“Wow!” “Really?”などのリアクションをすることで、相手に配慮する気持ちが養われ、会話がより長く続くようになった。



7. Closing (Reading + Writing・振り返り)

ワークシートに書かれた文字を手でなぞりながら読む。黒木先生が英語で説明したヒントから競技名を考えて答えをなぞって書く。最後に、今日の授業でできたことを振り返りカードに書いて発表した。

会話を楽しみ、温かな空気が漂う教室

授業が始まると黒木先生は、子供たちに向かって温かな笑顔で、にこやかに話し掛ける。そして、子供たちがやりたい気持ちを引き出していく。授業をつくるうえで何より大切にしているのは、「子供たちの実態に合っているか」ということ、「子供同士が会話を楽しみ、お互いを認め、発見し合うことがあるか」ということだという。外国語活動は小学校のことをよく知る小学校教諭だからこそできる授業だと、黒木先生は考えている。

黒木先生が5年生からもち上がりで担任をするこのクラスの子供たちは当初、英語に対する意欲が少なかったという。だが、子供

たちのやる気を大切に、外国語活動や総合的な学習の時間での東京工業大学の留学生との交流など、コミュニケーションを楽しむ活動を重ねるうちに、英語に対する意識が変わった。オリンピック・パラリンピック教育の取り組みをするなかで、「2020年に向けて何をしたいか」とアンケート調査をしたときには、「外国の人に英語で道案内ができるようになりたい」「英語を勉強しておきたい」「たくさん英語を書けるようになりたい」といった回答が多かったそうだ。

「これまでに積み重ねてきた経験から、子供たちが『英語を使ってコミュニケーションを取ることが楽しい』という意欲をもててい

ることの表れだと思います。だからこそ、もっと英語を使いたい、という気持ちが高まっています。外国や異文化についての話をして興味をもたせたり、英語を話したい、などといった気持ちを引き出したりが大事なのです」と黒木先生は話す。

小学校文化を知る教員だからこそ、 できる授業がある

外国語活動は学級経営につながる。コミュニケーションの積み重ねを通して、子供たちにはお互いを思いやり、助け合おうとする優しい気持ちが芽生えてきた。学級目標である“Respect”が、外国語活動を通じて

実現されている。

「2年間の外国語活動を通じて、授業最後の振り返りのときには、友達の良いところを認める発言や、自分が困ったときに友達が助けてくれたといった発言などが徐々に増えてきました」と喜ぶ黒木先生。「今日は『他者を配慮しながら』という相手意識をもたせることをめあてにしましたが、子供たちは“Oh, really?” “Wow!” “How about you?”といった表現を返しながら、友達と会話をつなげていく工夫を自分でしています。相手の発言に耳を傾けて聞こうとする態度が育っています。外国語活動のおかげで互いを尊重し合えるクラスになっていると思います」と述べた。

自信をもたせることが、意欲を引き出す鍵

洗足池小学校では、2017年度より5、6年生の外国語活動は年間50時間として、教科化を見据えて先行的に研究に取り組み、新教材も扱ってきた。「書く」活動も取り入れたが、ドリル的に文字を繰り返し書かせるようなことは決してせず、十分に音声で慣れ親しんだ単語について、黒木先生が与えたヒントから、子供自身が考えながら文字をなぞって書くという流れを大切にしている。実際には、子供たちの「英語を書きたい」という気持ちは高まっている。子供たちに興味をもたせるのは、教員の役割であり、小学校教諭が得意とする部分だと考える黒木先生。興味があれば、子供は自

ら学ぼうとする。音声で慣れ親しんでいるからこそ、その言葉を使って話したい、書いてみたいという気持ちが引き出されるのだ。

取材に訪れた日は卒業を間近に控えた時期だった。もうすぐ中学校へ上がる子供たちに対して、黒木先生は「日本語ではない言葉を使って、コミュニケーションをすることを楽しいと感じられる気持ちを大切にもち続けてほしい」と願っている。本年度10月19日には、大田区研究推進校研究発表会を実施する。「主体的・対話的で深い学びの実現」をめざして、全校体制で研究を進め、言語活動に取り組んでいる同校では、子供たちのコミュニケーションへの意欲がしっかりと芽生えていた。

〔連載〕

中学校・高等学校の

授業改善と

第1回 新学習指導要領を見据えて



学習指導要領に基づいた授業改善を

まず初めに、現行学習指導要領と新学習指導要領では、授業はどのように変わるべきなのかを考えてみましょう。

現行の高等学校学習指導要領が示した授業の方向性は「文法はコミュニケーションを支えるものとしてとらえ、文法指導を言語活動と一体的に行う」「授業を実際のコミュニケーションの場面とするため、授業は英語で行うことを基本とする」でした。この改訂が、その後の日本における英語教育改善のかじを大きく切らせたことは言うまでもありません。

急速な変化に弱い学校現場がやっと現行学習指導要領に追いついてきたところで、新学習指導要領が示されている下図の3つの柱を、どのように具現化していけばいいのでしょうか？

思考力・判断力・表現力をいかに高めるか

教科書のある題材を「聞いて」概要

を把握し、「話して」理解を確認する。さらに詳しい情報を求めて「読み」、内容について「話し」、さらに、その内容に関する自分の感想や意見を「書く」——という授業は多くの先生方が経験されていることでしょう。この授業構成においても「思考力、判断力、表現力を育成する」活動は含まれていますが、新学習指導要領では、この部分をさらに充実させる必要があります。

例えば、リスニングやリーディングによってインプットされた内容について、生徒が情報を正しく理解したかを確認する活動に加えて、「あなた自身はその意見に賛成か、反対か」「あなたがその立場だったらどのように考えるか、または行動するか」という“答えが決まっていない質問 (open-ended questions)”を与えて生徒に考えさせる機会をもたせ、個々の生徒の考えをスピーキングやライティングによって表す場面をつくる必要があります。

では、具体的な授業の場面を考えてみましょう。例えば、「世界がもし100人の村だったら (A Village of One Hundred)」を扱うとします。ポストリーディングにおいて、生徒に次の質問をする場面を想像してください。

You have learned a lot about the world. What fact are you interested in most?

この質問の目的は「生徒の思考力、判断力、表現力を育成すること」ですから、生徒が単に、“I am interested in the fact that 17 percent of the people in the world don't have access to safe drinking water.”と答えるだけでは目的を達成したことになりません。そこで、生徒にさらに考えさせる質問を与えます。「日本にいる私たちにも安全な飲料水が手に入らない状況は生じるのか?」「安全な飲料水が手に入らないとすれば、その水を安全なものに変える手段はあるのか?」など、生徒自身が興味をもっている情報を引き出し、リサーチして獲得した情報を共有し、活用できるような場面を与えるのです。

私は現行学習指導要領実施の初年度に、高等学校で次のような経験をしました。授業内で前述のような話し合いをした数日後、ある生徒が自宅での実験画像を見せてくれました。家庭の調理器具を使い、海水に見立てた食塩水を蒸発させて真水を取り、その真水を満面の笑みで飲んでいる写真でした。翌日彼は、コミュニケーション英語Ⅰの授業中に、写真を示しながら、英語で実験

評価のあり方

百瀬 美帆 (ももせ・みほ)

明海大学教職課程准教授。千葉県内の公立高等学校で、長年にわたり4技能を育む英語授業、国際交流プログラム等先導・推進してきた経験や県内の教員研修講師等の経験をもつ。2017年4月より現職。「レクシス英和辞典」(旺文社)、外国語教科書「empathy oral communication 1・II」(教育出版)などの執筆のほか、文部科学省作成「Broaden Your Horizons with English! - 英語を使って羽ばたく日本人 -」DVD添付用ワークシート作成に携わる。

の説明をしたのです。これは「興味の引き出し (eliciting interest)」が生徒の思考力を伸ばし、さらには「学びに向かう力」を引き出した事例 (eliciting a positive attitude toward learning) の1つです。

考える経験が思考力を伸ばす

「思考力」を伸ばすには、「考える」経験が必要です。教師は、生徒一人一人の「考える糸口」をできるだけ多く提供し、それぞれの実体験や深い思考に基づいた「考え」を引き出しましょう。その糸口は教師と生徒との親和関係から見えてくるものですから、日頃の授業で生徒の考えや発言を尊重し、どのような考えでも、間違いを怖れずに安心して発表できる雰囲気をつくることが求められます。ここに、「ファシリテーター」としての教師の役割が生まれてきます。そのためには、学びの速度が遅い生徒への「はしごがけ (scaffolding)」や、生徒が使用した表現を「適切な表現に言い換えて生徒に返す (recasting)」などの技術が必要です。

例えば、前述の授業場面で、不衛生な飲料水のために多くの子供が命を落としている事実を知った生徒が、“I was shocking!”という感想を発表したら、その生徒への共感を示すと共に、“Oh, you were shocked. I was shocked, too.”のように発言を確認してみましょう。そして、この場面で教師が示す表情や声のトーンは「やり取り」の大切なモデルとなります。

「思考力の育成」と「知識及び技能の習得」に優劣はありません。新学習指導要領では、「授業とは考えるために必要な知識や技術を習得する時間」であることは当然のこととしつつ、「知識及び技能」を「どのように使うのか (思考力、判断力)」「他者との関わりの中でどのように使うのか (表現力)」を育成することが求められます。生徒一人一人の能力を信じ、生徒が「主体的に、対話を通して深く考えたり、判断したりする活動」ができる工夫をしましょう。その活動はおのずと、「習得した語彙や語法に関する知識を使って聞いたり、読んだり、話したり、書いたり」「ディベートのようなやり取りのルール (知識) を使って聞いたり、話したり」しなければならないものとなるはずです。

Every Child Matters.

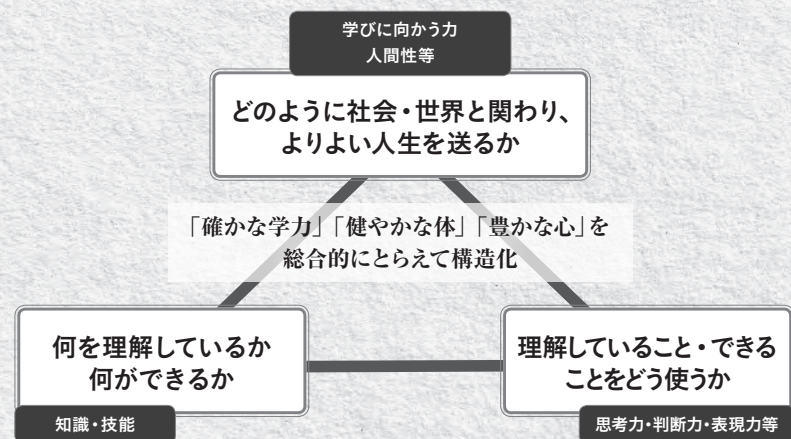
“Every Child Matters.”——これは、2017年度全英連新潟大会の基調講演で、名古屋外国語大学の太田光春教授が掲げられたスローガンです。聴衆は共感し、講演後の会場のあちこちでこの言葉が交わされていました。私はこの言葉を、「教師に与えられた使命は、生徒一人一人の能力を信じて引き出すこと」と考えます。新学習指導要領では、高等学校卒業段階での到達目標が「外国語を通じて、情報や考えなどを的確に理解したり適切に伝えたりすることができる力 (CEFR A2～B1レベル)」とされていますが、生徒一人一人に目を向けた時、同じ時期に全員が同

じゴールに到達することはあり得ません。「知識及び技能」「思考力、判断力、表現力」のそれぞれにおいて個人差があるはずです。それらを包括的に、さらに長期にわたって評価し、それぞれの生徒が卒業時に到達すべき目標にどれだけ近付けたのかを明確に分かるような授業をめざしましょう。

「あなたたちは、なぜ英語を学ぶのですか?」と生徒たちに尋ねると、多くの生徒は「世界の人々となつがるため」と答えるのではないのでしょうか。生徒は授業で、1日のほとんどを水汲みに費やす子供たちの存在を知り、「今は何もできないけれど、将来は世界に波及する行動を起こしたい」と考えるかもしれません。教師は、英語の授業を通して「他者との関わりの中で物事を考え、判断し、協力し合う人間を育成する (人間性の涵養)」役割を担っています。これこそが、AI (人工知能) ではなく、人の心をもつ教師に与えられた特権だと言えるのではないのでしょうか。英語の授業で世界に目を向け、世界の人々となつがり方を学び、将来世界に寄与する人間性を育む——私たち英語教師とは、なんと尊く、素晴らしい仕事なのでしょう。そのような気持ちを大切に、生徒の可能性を信じて引き出し、授業をつくっていききたいものです。

今回は、学校ごとの学習到達目標を記したCAN-DOリストを年間指導計画や授業計画に落とし込む方法について考えます。

【育成すべき資質・能力の三つの柱】



文部科学省提供

授業で「評価」のための 使えるアイデア

第1回：外国語教育における学習評価の充実

新学習指導要領の移行期間が始まり、外国語活動や外国語科の新教材に目を輝かせる児童を前に、少し緊張しながら授業に臨んでおられる先生方も多いのではないのでしょうか。毎回の授業は学習目標に基づいて行われますが、目標を設定し、授業計画を立てる際には、児童の学びをどのように見取り、評価するかについても検討する必要があります。今回は、その評価を考えるために理解しておくべき「外国語教育における学習評価の充実」の方向性について考えます。

外国語教育で育成を目指す 資質・能力

新学習指導要領の外国語活動・外国語科では、他者とのコミュニケーション（対話や議論等）の基盤を形成する観点が「育成を目指す資質・能力」の全体を貫く軸として重視されており、さらにその「資質・能力」がほかの側面（創造的思考、感性・情緒等）からも明確となるよう、「知識・技能」「思考力・判断力・表現力等」「学びに向かう力・人間性等」という3つの柱に基づいて整理されています（幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）」中央教育審議会、平成28年12月21日）。これら3つの観点のうち、「知識・技能」と「思考力・判断力・表現力等」は、外国語で聞いたり読んだりして得た知識や情報、考えなどを的確に理解したり、活用して適切に表現し伝え合ったりすることで育成されるものです。そして統合的な言語活動を一層重視しながら、これらを一体的に育成する過程を通して「学びに向かう力・

人間性等」を育みます。小学校の外国語活動と外国語科においても、育成を目指す資質・能力の3つの柱それぞれが、「目標」として詳細かつ明確に示されています。

さらに新学習指導要領では、小・中・高等学校を通じて一貫した外国語教育の目標を実現するため、外国語学習の特性を踏まえて育成する「知識・技能」と「思考力・判断力・表現力等」について、「聞くこと」「読むこと」「話すこと（やり取り）」「話すこと（発表）」「書くこと」の5つの領域ごとに具体的な目標がまとめられています。すなわち、高等学校卒業時に求められる資質・能力を明確にしたうえで、学校種ごとに児童生徒の発達段階に応じた形で領域別の目標を設定することにより、「段階的に」その資質・能力に至ることが目指されています。そして各学校において、国が学習指導要領に定めるこれらの領域別目標を踏まえ、児童の学習状況や地域の実態などに合わせた具体的な学習到達目標を設定していくことになります。

目標に準拠した学習状況の評価

資質・能力のバランスのとれた学習評価に向けて「指導と評価の一体化」が図られるなか、答申では、学習状況を分析的に捉える「観点別学習状況の評価」の観点として、小・中・高等学校の各教科を通じて「知識・技能」、「思考・判断・表現」、「主体的に学習に取り組む態度」の3つが設定されました。これらは資質・能力の3つの柱に対応すると捉えられますが、答申によると、「学びに向かう力・人間性等」に示された資質・能力には、感性や思いやりなど幅広いものが含まれます。そのため、①「主体的に学習に取り組む態度」として観点別評価（学習状況を分析的に捉える）を通じて見取ることができる部分と、②観点別評価や評定にはなじまず、こうした評価では示しきれないことから個人内評価（個人の良い点や可能性、進歩の状況について評価する）を通じて見取る部分があることに留意する必要があります。これを踏まえ、この資質・能力に対応する評価の観点は「主体的に学習に取り組む態度」とされています。

外国語活動・外国語科においては、育成を目指す資質・能力、すなわち「外国語を使って何ができるようになるか」を明確にするためだけでなく、学習を通して児童生徒に「何が身に付いたか」を評価するために同じ3つの観点をを用いることで、「学習指導要領に定める目標に準拠した評価」の実質化を図ります。これはさらに、「教育目標や内容の設定、授業計画（Plan）」→「授業の実施（Do）」→「学習・授業計画の評価（Check）」→「授業の

改善・目標の見直し（Act）」のPDCAサイクルの形で、学習評価の改善を教育課程や学習・指導の改善と一貫性をもたせて行うことを目指すものとも言えます。

小学校外国語活動と外国語科の評価

小学校外国語教育における具体的な学習評価については、答申に下記のような指摘があります。

さらに答申には「学習評価の意義等」として、「学習の成果を的確に捉

え、教員が指導の改善を図るとともに、子供たち自身が自らの学びを振り返って次の学びに向かうことができるようにするためには、この学習評価の在り方が極めて重要であり、教育課程や学習・指導方法の改善と一貫性を持った形で改善を進めることが求められる」「教員は、個々の授業のねらいをどこまでどのように達成したかだけではなく、子供たち一人一人が、前の学びからどのように成長しているか、より深い学びに向かっているかどうかを捉えていくことが必要」と述べられています。つまり学習評価は、外国語教育の特性や児童の発達の段階を考慮しながら、一人一人の学びの過程における現在の学習状況を的確に把握するものであるだけでなく、児童が学びを振り返るきっかけ、動機付け、方向付けとなり、教員にとっても指導改善の根拠となるものでなくてはなりません。そのための評価方法の理解や選択、工夫が求められていることを、常に意識していきたいものです。

これら外国語教育の評価の充実に関する基本的な考え方を踏まえ、次回より評価の工夫について具体的に考えていきたいと思います。

○ 小学校高学年の教科としての外国語教育における「観点別学習状況の評価」についても、中・高等学校の外国語科と同様に「知識・技能」、「思考・判断・表現」、「主体的に学習に取り組む態度」の3観点により行う必要がある。その際、必要な資質・能力を育成するための学びの過程を通じて、筆記テストのみならず、インタビュー（面接）、スピーチ、簡単な語句や文を書くこと等のパフォーマンス評価や活動の観察等、多様な評価方法から、その場面における児童の学習状況を的確に評価できる方法を選択して評価することが重要である。

○ また、小学校高学年の外国語教育を教科として位置付けるに当たり、「評定」においては、中・高等学校の外国語科と同様に、その特性及び発達の段階を踏まえながら、数値による評価を適切に行うことが求められる。その上で、外国語の授業において観点別学習状況の評価では十分に示すことができない、児童一人一人のよい点や可能性、進歩の状況等については、日々の教育活動や総合所見等を通じて児童に積極的に伝えることが重要である。小学校「外国語活動」については、現行の学習指導要領において数値による評価にはなじまないこと等とされていること等を踏まえ、顕著な事項がある場合に、その特徴を記入する等、文章の記述による評価を行うことが適当である。

平成28年12月21日答申より



池田 周（いけだ・ちか）

愛知県立大学外国語学部准教授。英国ウォーリック大学博士課程修了。博士（英語教育・応用言語学）。小学校英語教育学会愛知支部理事、「愛知県義務教育問題研究協議会専門部会」委員、文部科学省「小学校の新たな外国語教育における補助教材の検証及び新教材の開発に関する検討委員会」委員などを務める。外国語としての英語リテラシー習得について、小・中・高等学校を通じた指導のあり方、および国語科と外国語科の連携に関心をもつ。

〔連載〕

安河内哲也先生が聞く

英語で授業



明日から
使える！

【第15回】

7つの鉄則

特別編

このコーナーでは毎回、英語講師の安河内哲也先生が各地の学校を訪ね、英語で授業を行うための「7つの鉄則」について英語科の先生にお話を伺っています。新年度を迎え、今号では、〈特別編〉として、安河内先生が大学入試を踏まえた新しい英語教育の方向性から、「4技能+語彙・文法指導における鉄則」をご紹介します。

Enjoy Teaching
in English!

私が言語活動型の授業を始めて5年が経ちました。大学を卒業するときに先生から言われた“Enjoy Teaching”の言葉は、今でも心に留めて指導しています。教える側が楽しんで教えることが、生徒には何よりも良い影響を与えます。ぜひ、皆さんも「英語で授業」を楽しんでください！

AR

詳しくは
動画で！

Enjoy
Teaching
in English!



安河内 哲也 (やすこうち・てつや)

一般財団法人実用英語推進機構代表理事、東進ハイスクール、東進ビジネススクール英語講師。文部科学省「英語教育の在り方に関する有識者会議」委員を務める。英語学習の楽しさを世に広めるべく、テレビ番組などでも大活躍中。英検1級など英語関連の多数の資格を持つことでも知られる。

スピーキング指導の鉄則

生徒の口と頭が
動く授業をする

予備校講師として20年にわたり、日本語で、知識伝達型のチョーク&トークの授業をしてきました。しかし、学習指導要領が変わり、大学入試での4技能テスト活用の広がりを受けて、5年前に授業スタイルを変えました。

初めは、指導するための言語を英語に置き換えただけで、私が英語で話し続けていましたから、生徒にとっては退屈で理解ができません。これではいけないと改善したのが、対話型の授業スタイルです。予備校では100名近い生徒が教室にいますから、私と生徒の対話は限られます。そうして生徒同士で英語を話させるスタイルを確立していったのです。

ペア・ワークやグループ・ワークを取り入れ、生徒同士がリラックスして英語を話す環境をつくり、「教室でしかできない授業」を心掛けました。すると、生徒の授業への満足度が高まり、英語力も向上したのです。

AR



詳しくは
動画で！

ライティング指導の鉄則

意識させる
AREA構造を

これまで英作文というと、日本語を見て英語を書くというものが多かったのですが、これからの大学入試では、字数制限のもとでのエッセイ・ライティングが求められます。ライティング力を高めるために必要な指導は、スピーキング同様、まず、Fluency first, accuracy second.を意識して、生徒に間違いを恐れずにたくさん書かせることです。また、論理的に書く力も必要です。そのためには、Assertion (意見表明) - Reason (理由) - Evidence (根拠) - Assertion (結論)のAREA構造に沿って、自分の意見を、理由や根拠を示しながら書く練習をさせましょう。なお、ライティングの評価には、ご自身やALTなどに協力を仰いで添削していらっしゃると思いますが、エッセイ・ライティングの添削には時間がかかるものです。最近では、オンライン添削システムも充実しています。そうしたシステムを活用して、効率的・効果的な指導に役立てましょう。

AR



詳しくは
動画で！

リスニング指導の鉄則

精聴学習と多聴学習を
バランスよく

リスニングには、1つ1つの音を聞き取る力（精聴）と、聞こえてきた内容の要点をつかみ取る力（多聴）が求められます。

精聴においては、ディクテーションのように、ただ耳で聞き取って書くだけでなく、発音の力と聴解の力を同時に伸ばすことが大切です。私たちは自分が普段発音している音を期待して聞きますから、日頃からディクテーションをして、リピーティング、シャドーイングといった流れで、耳で聞いた音を発音する練習を取り入れましょう。とはいえ、全ての英語を聞き取ることなど不可能です。そこで、要点をつかみ取るスキニングの力を鍛えるために、リスニング問題を活用しながら、設問に目を通し、要点を押さえて聞き取る練習を取り入れてみましょう。洋画や日本のアニメの英語版を使って練習をすると、生徒も興味をもって学習することができます。

AR



詳しくは
動画で！

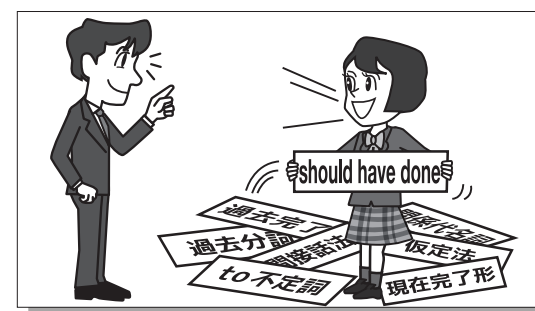
文法・語彙指導の鉄則

必要なものを厳選して
例文で教える

文法については、これまで私たちは大学入試で出題されるという理由から、生徒が実際のコミュニケーションの場面で使用することのないものまで教えていたのではないのでしょうか。そこで、これからは必要な文法を厳選して教えていきましょう。中学英語＋高等学校の学習指導要領で求められる程度の文法で十分です。例えば、should have doneといった文法を指導する際には、それを使った例文を提示して、生徒自身が文法を使って会話をするといった言語活動を通じて、使って覚えるようにするとよいでしょう。

また、語彙指導においても同様で、生徒が必要な語彙を、パッシブ語彙とアクティブ語彙に分けて習得させます。特に、話すため、書くために必要な語彙は何かを分類し、実際に使う可能性がある例文を活用して学びます。生徒の耳で聞き、口を動かす技能統合型で覚えることが大切です。

AR



詳しくは
動画で！

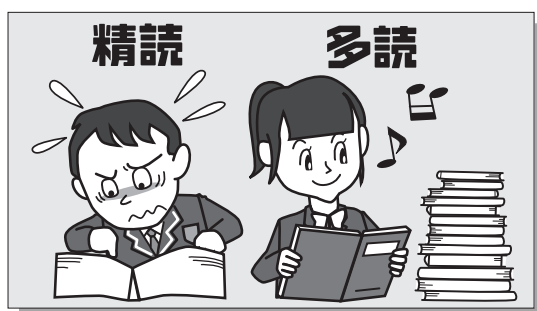
リーディング指導の鉄則

精読に加えて
多読を重視する

かつての私の指導は、文構造を理解させ、文法を指導することに重点を置き、日本語で教えるというものでした。しかし、重要事項はプリントにまとめて配布すれば生徒は理解ができますので、あとはリピーティングやシャドーイング、オーバーラッピングなどの音声活動を行うことで英文が読めるようになります。

ただし、英語を母語としない私たち日本人、しかも高校生にとっては、難解な英文を精密に読んで理解する勉強ばかりでは楽しくなくなってしまいます。精読に加えて多読が必要です。そこで、リスニング同様に、大まかに要点をつかみながら読む多読を重視しましょう。「覚えないう・調べない・繰り返さない」をモットーに、生徒が楽しんで読めることを念頭に、あまり難しくないレベルの素材を選びましょう。多読をするときには、累計ワード数やレビューを書かせるなどして、生徒が読書を楽しめる工夫をすることが大切です。

AR



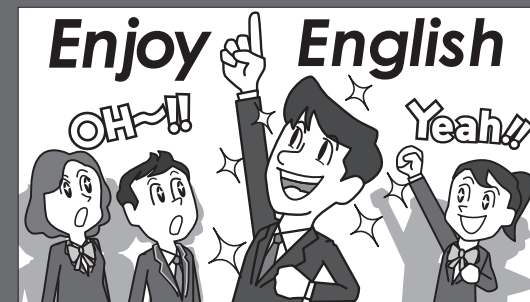
詳しくは
動画で！

英語教師が英語学習を楽しみましょう！

先生は生徒にとって身近なロールモデルですから、先生自身が英語を楽しんで学び、使っていなければ、生徒に英語学習の楽しさは伝わりません。

私が実践しているオススメの英語学習法をお教えします。まず、「授業で英語を話す」ことです。下手でも間違えてもいいので使うこと。話せば話すほど、英語力は上がります。次に、「多読」です。移動時間や待ち時間など少しでも時間がある時には、電子書籍を音読しながら楽しんでいます。さらに、「オンライン英会話」もオススメです。世界中の人たちとの会話を楽しみ、英語を話すことが日常になります。「動画配信サービス」を活用し、海外ドラマや映画を、英語字幕を表示しながら流しっ放しにするのもよいでしょう。「学校でも自宅でも英語漬けになり、しかも、楽しめること」。それが、英語教師の英語学習の鉄則です。

AR



詳しくは
動画で！



高等学校編

第1回

生徒の主体的な学び、自律的な学習をめざして



茨城県立取手第一高等学校
花沢 典行 先生
Noriyuki Hanazawa

高等学校の新学習指導要領が告示されました。今回の学習指導要領は、生徒が身に付けた知識を活用して、課題の解決方法を探る授業を通じて、主体的に学び、生涯にわたって学び続ける姿勢を養うことをめざしています。現行の学習指導要領の「授業は英語で行うことを基本とする」という基本方針をさらに充実、発展させ、生徒の言語活動を高度なものにしていくために、どのような授業が求められるのでしょうか。第1回は、茨城県立取手第一高等学校の花沢典行先生による、新学習指導要領を見据えた実践をご紹介します。

新学習指導要領への対応をめざした取り組み

本校は、利根川を挟んで、千葉県との県境にある総合学科の高等学校です。プラクティカル系列のメカニック分野とビジネス分野、インフォメーション系列の情報技術分野、アカデミック系列の文科系分野と理科系分野の3系列5分野からなります。新学習指導要領への対応をめざした本校での取り組みを紹介させていただきます。

まず、帯活動での継続的な発信力の強化です。毎時間、初めの5分程度をペアでのスピーキング活動に充てています。昨晩したことやゴールデンウィークにしたいことなどの身近なトピックから始めて、実用英語技能検定（英検）準2級の二次試験レベルの質問（Do you think drinks in plastic bottles will be more popular in the future?など）を経て、英検2級の二次試験レベルの質問（Some people say that parents today give too much freedom to their children. What do you think

about that?など）へと、徐々にトピックのレベルを上げていきます。また、スピーキングの準備時間も徐々に短くし、最終的には即興でのスピーキングへと難易度を上げていきます。さらに、意見を「発表」するだけの活動から、質問をすることを経て、相手の意見に対する反論をする「やり取り」の活動へといったステップで徐々に負荷をかけるようにしています。

次に、課末活動での、統合的な言語活動による総合的な英語力の育成です。教科書本文の内容理解活動のあと、本文のトピックに関連するスピーキング、もしくはライティング活動を行います。例えば、異文化理解についての課を読んだのち、You cannot truly understand the culture of a country unless you live there.というトピックでライティング活動を行い、それをグループで発表するスピーキング活動へとつなげました。このように、受容技能と発信技能を有機的につなげようとするにより、英語力を総合的

に育成することを図っています。

最後に、CAN-DOリスト形式の学習到達目標に合わせて前述の言語活動をデザインし、そのルーブリックを生徒と共有することです。前述の異文化理解に関するライティング活動は、3年次前期の「社会的なテーマについての自分の意見を、構成を意識したうえで理由を2つ入れて、20分程度で60語程度で書くことができる」という学習到達目標を念頭に置いた言語活動です。【表1】はそのルーブリックですが、これを生徒に提示することにより、生徒はこの活動の目標はどこにあるのか、どのような点に気を付けて書かなければいけないのかを意識しながら活動に取り組むことができます。また、たとえ今回はB基準にしか達しなかったとしても、次の活動でA基準に達するためにはどうしたらよいのかなど、次の学習へとつなげることができます。このような取り組みを通して、生徒の主体的な学び、さらには自律的な学習へとつなげていきたいと考えています。

【表1】

評価の観点	A（十分満足できる）	B（おおむね満足できる）	C（努力を要する）
内容	トピックについて、自分の立場を明確にしたうえで、根拠のある理由を2つ書くことができる。	トピックについて、自分の立場を明確にしたうえで、理由を2つ書くことができる。	トピックについて、自分の立場を明確にしたうえで、理由を1つ書くことができる。
語数	70語以上	60～69語	59語未満
構成	各段落内にトピックセンテンスとサポーティングセンテンスがあり、段落内の展開が明確で一貫性がある。	各段落内にトピックセンテンスとサポーティングセンテンスがあり、情報量がある程度ある。	各段落内にトピックセンテンスはあるが、サポーティングセンテンスが不十分、あるいは、関連性が見られない部分がある。
正確さ	細かいミスがあるものの、読み手の理解に支障をきたす大きな誤りはない。	意味が分からない、または誤解を招く部分があるが、読み手がほとんど理解できる。	意味が分からない、または誤解を招く部分が多量にあり、読み手がほとんど理解できない。

英語教員海外研修の実践

昨夏、シドニーのニューサウスウェールズ大学での英語教員海外研修（公益財団法人 日本英語検定協会主催）に参加させていただきました。長年にわたり第二言語習得法に関する指導経験をもつ同大学の先生方のもとで、指導法についての理解を深めることができました。また、現地校を訪問しての授業参観や、参加者同士でのマイクロティーチングを通して、実践力を高めることができました。

この研修で学んだ指導法から、帰国後はConcept checkingとEliciting

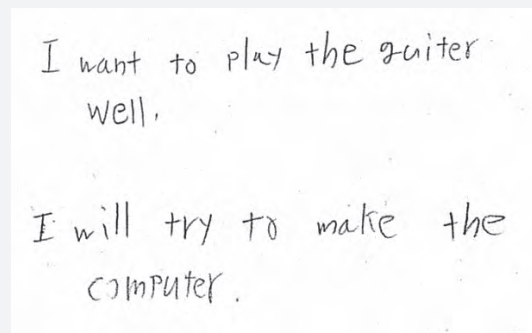
の手法をすぐに授業に取り入れました。指導事項や指示事項の確認の際、単に“Do you understand?”などと発問するだけでは、生徒は理解していません。そこで、生徒自身に説明するように求めたり、身の回りのものと結び付けて質問をしたりなど、発問の工夫をするのがConcept checking です。また、Elicitingは生徒から考えや答えを引き出す手法です。例えば、ある単語を答えさせる意図の発問で、同義語や対義語を提示したり、視覚情報でヒントを与え

たりすることなどにより意図した答えを引き出します。以前は授業の進度やテンポ等を言い訳に、生徒を受け身にさせるような発問や指示をしたり、答えを教員側から明示したりすることにより、生徒の思考を停止させ、その成長にふたをしていました。前時の復習や指示内容、解答の確認など、授業の随所にこれらの手法を取り入れることにより、生徒の思考を活性化させ、生徒主体型の授業を展開できると考え、我慢強く生徒の答えや考えを引き出すことを念頭に、発問を工夫するようにしています。

生徒の変容

以上のような取り組みを続けてきた結果、生徒に興味深い変容が見られるようになりました。

【作品1】は情報技術分野の生徒の2年次4月の作品です。年度初めということで、今年度の抱負について書きました。

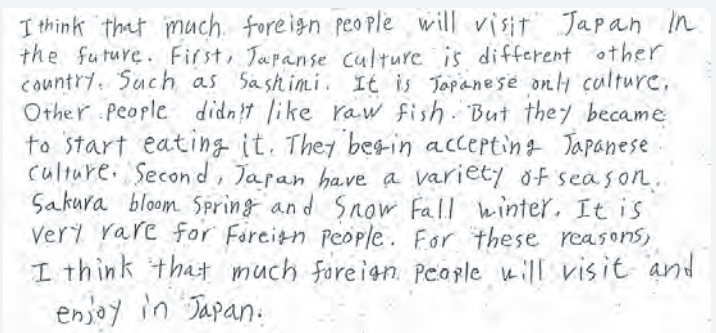


【作品1】2年次4月

まだ、生徒との親和関係を築くことができていなかったからかもしれませんが、単文で情報を伝えるのみにとどまっています。

【作品2】は同じ生徒の3年次4月の作品です。外国人旅行者に関する話を

読んだあとの課末のライティング活動で、「今後外国人旅行者が増えるか」というトピックについて書きました。文法・語法やつづりの間違いはまだありますが、1年間で思考力、表現力を大きく伸ばすことができたのではないかと思います。



【作品2】3年次4月

失敗を恐れずに挑戦する

日々の言語活動を通して、英語力はもちろんですが、次のような姿勢・態度も養いたいと考えながら授業に臨んでいます。それは、Challenge (Mistakes are O.K.)、Cooperate (Work with your classmates.)、Accept (Everyone is different.) です。そして、この目標は常

日頃、生徒たちにも伝えるようにしています。異なる考えや背景をもつ他者と協働しながら物事に挑戦していく。そのような生徒たちを、英語の授業で育てていきたいと思っています。

今後は、新学習指導要領に対応した「話すこと [発表]」と「話すこと [やり取

り]」の学習到達目標をつくること、それに合わせてほかの3技能の学習到達目標も見直すこと、それらを各科目・言語活動と評価に落とし込んでいくことが大きな課題です。私自身も、ほかの先生方と協力しながら、失敗を恐れずに、これらの課題に挑戦していきます。

中学校編

第1回

書かなくても伸びる?!



岩手県 一関市立千厩中学校

右京 久里子 先生

Kuriko Ukyo

2017年3月に告示された中学校の学習指導要領は、2018年度から3年間の移行期間を経て、2021年度より全面实施となります。今回の改訂により、英語の授業は、「生徒が英語に触れる機会を充実するとともに、授業を実際のコミュニケーションの場面とするため、授業は英語で行うことを基本とする」とされました。新学習指導要領に向けて、授業改善に取り組む先生方の実践をリレー形式で連載します。第1回は、岩手県・一関市立千厩中学校の右京久里子先生による前任校での実践をご紹介します。

キーワードは「使える英語」

まず初めに、右表を見てください。これは、私が2017年度まで勤務した岩手県立一関第一高等学校附属中学校で生徒たちが受験した、英検IBAの結果です。「前回」と「今回」では、平均点に10点の差があります。また、最低スコ

アを見ると120点近い差が現れました。実は、この「今回」の生徒たちは授業中に一切書く活動をしていません。それでは私がどのような授業をしてきたのか、その一部をご紹介します。

集計	今回 E-01	前回 E-03
平均スコア	766	756
満点スコア	800	800
最高スコア	800	800
最低スコア	620	508

「使える英語」を教えるための授業づくり

2013年夏、私は「第2回 全英連・英検共催 中高英語教員向け国内研修」に参加しました。基調講演で話された「これからの社会は、英語を武器に社会で活躍できる人材を必要とするようになる」ということを聞き、生徒たちが英語を武器にするためには、「使える英語」を教えなければならないと痛感しました。そこで、中学1、2年生では「海外旅行ができること」を、中学3年生では「海外や外国人と働くことができること」を目標に、授業を展開しようと考えました。

実践1 1年生～キャビンアテンダントにお願い～

中学1年生は、機内でキャビンアテンダント（CA）と話すことが目標です。全員が食事を選ぶやり取りをし、そのほかに毛布を借りる、ドリンクのおかわりをする、などの条件を自由に選ぶように伝え、ペアで表現の仕方を考えます。そのあと、実際に伝わるかをALTにCA役になってもらい練習します。ポイントは、新出文法を扱うための活動ではないということです。海外旅行を目的とした活動では、既習表現からどれを使用するのが最適かを生徒自身が考え、より自然な会話になるように工夫していくことを目的としています。教員側の工夫点は、条件にレベルを付けることで、より多くの表現に触れたり、ALTと実際に話したりする回数を意図的に増やすことです。

ALT : (新聞を持って通路を歩いている)
生徒 : Excuse me. May I read the newspaper?
ALT : Of course. Which newspaper do you need?
生徒 : OO, please.
ALT : Here you are.
生徒 : Thank you.



実践2 2年生～海外旅行にアクシデントはつきもの!?～

中学2年生は、「レストラン」「ホテルでのチェックイン」「買い物」の場面を設定し、実際に海外に行ったつもりでALTと会話をします。その際、より実際の場面に近い状況での会話となるよう、アクシデントが意図的に仕組まれます。

例えば、ホテルでのミッションは、「チェックインをしたあとに、自分たちが行きたい観光地までの行き方を尋ねる」ことです。ペアやグループで練習したのち、パフォーマンスの時間になると、会話を進める途中で、予約していたはずの部屋が取れていない、ツインを予約していたのにダブルになっていたなどのアクシデントが起こります。しかし、生徒はミッションをクリアしなければならないため、ペアやグループで相談しながら即興で会話を続け、何とか危機を乗り切ります。そしてさらに、JTLが英語が苦手な観光客役として「観光地までの道のりを代わりに尋ねてきてほしい」などと話し掛けてきます。

最初に挑戦したグループは、突然のアクシデントにかなり戸惑っていましたが、ほかのグループの生徒はその様子を見ながら、どうしたら対応できるかを考えます。ミッションをクリアできたときの生徒の喜びはひとしおで、見ていた生徒からも拍手が自然と沸き起こりました。

ALT : (チェックイン後) Enjoy your trip.

生徒 : Excuse me. Would you tell me the way to the statue of Liberty?

ALT : Yes. We take a bus from here. Then please board a ship.

生徒 : All right. Thank you.

JTL : すみません。これから自由の女神に行きたいのですが、どうやって行くのか教えていただけますか?

生徒 : バスに乗ってから船で向かうそうです。

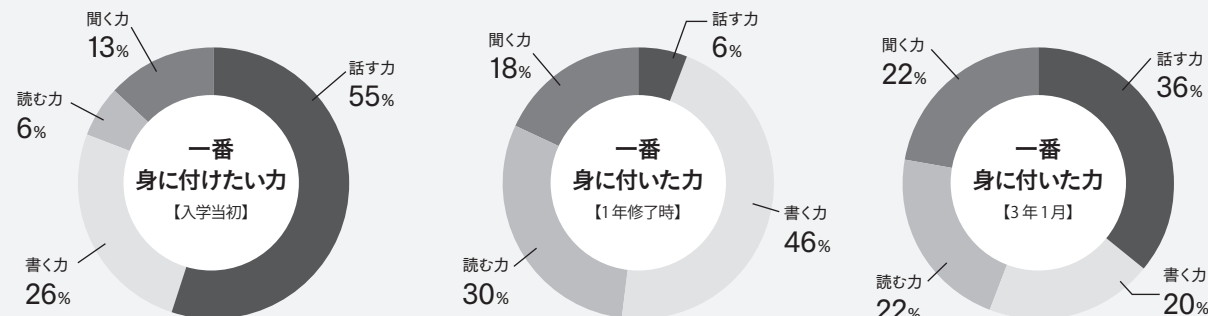
JTL : バス停はどこにあるんですか?

生徒 : …。

JTL : 私、英語が苦手なので、代わりに聞いてもらえませんか?

※生徒は再びALTの元へ行き、ホテルからバス停までの道のりを尋ねます。JTLはそのあと、どのバス停で降りればよいのかを尋ねてほしいなどと質問します。※先に活動したペアを参考にJTLから質問される内容を予測し、事前にALTに詳しく聞いておく生徒もいます。なかには「We are going to go there. Let's go together.」と返す生徒もいました。

習うより慣れろ



上記のアンケート結果から、「話す」と「聞く」ことに重きを置いた授業展開でも、「読む力」と「書く力」も同様に力を付けていることが分かります。このことから、授業では生徒が話したり聞いたりする時間を多く取り、読んだり書いたりするのは「目的意識をもたせたうえで家庭で行わせる」のがよいのではないかという結論に至りました。

では、どのような課題を出していたのかを一部ご紹介します。

2年生課題【パンフレット】

総合的な学習の時間で行った「平泉学習」での学びを、英語パンフレットという形で残しました。作品は、西磐郡平泉町の観光協会にご協力いただいて、各観光地に置いてもらい、実際に外国人観光客の手に渡るようになっています。



何はともあれ、私たち教員が楽しんで授業に臨むこと、そして目の前の生徒にとって一番良い授業はどのようなものなのかを考えることを、常に頭頭に置くことが必要なのではないかと感じている今日この頃です。

小学校編

第1回

「もっと知りたい!」「もっと伝えたい!」という気持ちに
火を付ける授業づくり



東京都 狛江市立緑野小学校

今西 佑 先生

Yu Imanishi

2017年3月に告示された小学校の学習指導要領により、2020年度から3、4年生では外国語活動、5、6年生では外国語科が導入されます。全面実施を前にして、これから2年間の移行期間中にできることはあるのでしょうか。新学習指導要領に向けて、どのような実践を積んでいるのか、小学校の先生方の取り組みをリレー形式で連載します。第1回は、東京都狛江市立緑野小学校の今西佑先生の実践をご紹介します。どのような場面設定をした言語活動を取り入れているのでしょうか。

子供の考えを引き出し、一緒につくり上げる授業

私は「2017年度 英検 英語教員海外研修」に参加しました。オーストラリアという地で、国を越えて人と思いが通じ合うことの喜び、研修に参加した仲間と教材研究をすることの楽しさと充実感を、あらためて実感することができました。多くの指導法を学びましたが、何よりも現地でのリアルな体験、そして仲間と過ごした時間が、帰国後の私にとって、より良い授業をつくりたいという活力になっています。

海外研修を通じて私が学んだことのなかで、最も印象に残っていることが「児童から引き出すこと（Eliciting）」です。これは全教科に共通することですが、授業中はできるだけ子供たちに予想させたり、考えやアイデアを引き出したりするようにしています。そのようにして子供たちと一緒に授業をつくると、授業後の子供たちの顔は授業前とはまったく違います。ただ「ゲームが楽しかった」というだけの授業はあまり子供たち

の心に残りませんが、ゴールを明確にして子供たちと一緒につくり上げた授業は心に残ると思います。

授業も、先生と子供のコミュニケーションだと思えますので、日頃から、子供たちの多様な意見を引き出しながら、「何のために学んでいるのか」「このセンテンスを使って何を目的とするか」ということをはっきりさせるように意識して授業を行っています。

昔遊びや世界のデザートを題材に主体的に学んだ子供たち

私は昨年度2年生の学級担任をしていました。海外研修後に取り組んだ実践を2つ紹介しましょう。

実践1 ジェームズ先生に日本の遊びを紹介しよう

ある日の休み時間、子供たちからこのような相談を受けました。「ジェームズ先生(ALT)と遊びたいけれど、英語が話せないから誘えない…。」何をして遊びたいかを尋ねると、子供たちは生活科で体験した昔遊びがしたいと答えました。子供たちが意見を出し合い、最終的には「福笑いでジェームズ先生と一緒に遊び、日本の遊びを紹介しよう」ということになりました。

そして、子供たちと一緒に、遊びに誘う言い方をはじめ、どのような表現が必要かを考え、当日までの準備として3時間の授業を行いました。福笑いで新教材『Let's Try! 1』の「Unit 8 What's this?」の表現を使いました。すると、ジェームズ先生と福笑いをする日をどの子も待ちきれない様子で、交流後も「先生、ジェームズ先生と縄跳びしてくる!」「剣玉してくる!」「先生、ジェームズ先生の名字や出身の国を教えてください」と、うれしそうに報告してくれました。2年生の子供たちが、どのようにしてジェームズ先生の出身地などを聞き出したのかは気になるところですが、たった3時間の授業で別人のように変わった子供たちを見ると、子供たちの学ぶ意欲と吸収力の高さに驚かされます。学級担任として、子供たちが正しい英語で会話ができただかどうかではなく、自らコミュニケーションを図ろうとするその姿勢を見ることができ、うれしかったです。



実践2 世界のデザート屋さん

本校は学校図書館教育が盛んです。そこで、司書教諭の先生と連携しながら授業を組み立てるようにしました。外国語活動用新教材『Let's try! 2』より「Unit 7 What do you want?」のセンテンスを使って、まずは自分が食べたいデザートを選んだり相手に尋ねたりする活動を計画しました。デザートにした理由は、①2年生にとってなじみのあるデザートを選ぶことで無理なく取り組ませたかったこと、②なじみのあるデザートでも海外発祥のものがたくさんあることを知ってもらいたかったこと、③世界の国々に関心をもってもらいたかったこと、などが挙げられます。

なかには、プリン（Pudding、イギリス）のように、日本語と英語の発音が違うことにも驚いていた子供がたくさんいました。そして授業後、子供たちから「デザート以外にも世界の国のことがもっと知りたい」との声が上がり、オリンピック・パラリンピック教育の一環として、図書の時間を使って世界の調べ学習を進めていきました。授業の最後には韓国の方をゲストスピーカーにお招きして、平昌オリンピックのことや、韓国の食文化や小学校について教えていただきました。そして、最後には一緒に「コンギ」という韓国の伝統的な遊びを楽しみました。調べ学習を進めていくうえで、子供たちは英語のみならず、多様な言語に興味を示していました。「○○語のあいさつには、必ず同じ言葉が最初に付いている!」のように、言語に関する気付きも見られました。外国語活動が子供たちの「もっと知りたい!」という気持ちに火を付けることができたと思います。



担任だからできることを意識した実践

これらの実践は、「子供たちから引き出すこと」、そして「担任だからこそできる他教科や学校生活との関連」を意識した実践です。私の実践は低学年を対象にしたものですが、授業づくりにおいて気を付けていることは中学年も高学年も変わりはありません。英語がコミュニケーションのツールである以上、「この活動にコミュニケーションの必然性や意味があるのか」「ただ楽しいだけの授業ではなく、新しいことを知ること、人とのコミュニケーションの達成感につな

がっているか」を踏まえたうえで単元のゴールを設定し、場の設定を工夫するようにしています。他教科と関連させながら、子供たちの興味関心を引き出すことができるのが学級担任です。クラスの子供たちの声から一緒につくっていく学級担任が行う英語の授業には、魅力がいっぱいつまっています。CLIL(内容言語統合型学習)の観点からもそう思います。

いよいよ2018年度から移行期間に入りますが、先生が何でも知っていて、

英語が堪能である必要はありません。ただ子供たちから引き出し（Eliciting）ながら、一緒に授業をつくっていくことを大切にしていきたいと思っています。また、新教材を教えるための授業ではなく、新教材を使って目の前の子供たちに何をどう教えるかを大切にしたいと思います。そのためには、子供たちがどのようなことに興味をもっているかを知り、日頃からの親和的な関係づくりを踏まえて、コミュニケーションを大切にしたいものです。

移行期間に小学校の先生方がすべきこと

教えなければならないことが増え、方法論や指導方法ばかりに目がとらわれがちです。しかし、一番大切なのは、「英語が好き! 楽しい!」というバトンを中学校に託すことだと思います。そのために、視野を広くもち、アンテナを張り、自らさまざまな体験をすることを心掛けています。その経験が授業で使えるAuthentic materialにつながると思います。教員自身の経験から生まれる授業は、子供たちを引き付ける魅力があると考えています。

また、中学校や高等学校の先生と交流する機会があれば積極的に参加する

とよいと思います。小学校だけが独立して指導するのではなく、小学校はあくまでも子供が成長していく期間の一部であり、小・中・高等学校が一貫して指導していくからこそ、学びや自信が積み重なっていくと思うからです。そのためには、中学校や高等学校では何をゴールとして英語教育を行っているのかということに関心をもつことは大切だと思います。

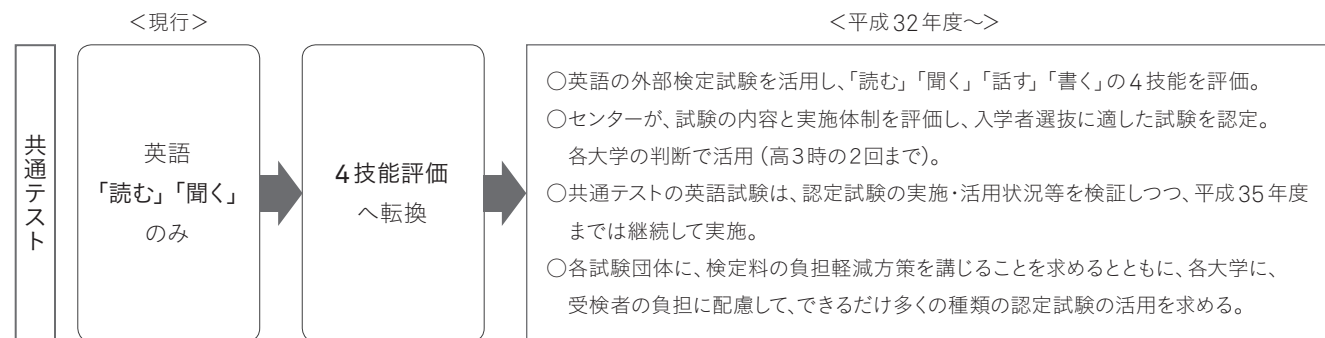
全教科を教え、忙しい小学校の学級担任にとっては、一人で授業の準備をしたり、英語のスキルを身に付けたりすることは難しいものです。だからこそ、この

移行期間にたくさんの先生方と情報交換をして、実践をシェアすることが大事ではないでしょうか。小学校は楽しい授業をつくり出すためのアイデアを豊富におもちの先生方が数多くいます。外国語活動、外国語科の授業の枠を超えて、一人でも多くの先生方からアドバイスやヒントを得ることが大切だと思います。先生間でもコミュニケーションを図りながら、少しでも多くの先生方が外国語活動、外国語科の授業に前向きに取り組んでいくことができるような移行期間を過ごしていきましょう!

2020年度から実施予定の「大学入学共通テスト（共通テスト）」に向けて、外国語科（英語）の試行調査（プレテスト）が2018年2月中旬から3月上旬にかけて実施された。共通テストがめざす方向性、試行調査の目的やその結果から見たことなどについて、独立行政法人大学入試センターの大杉住子審議役にお話を伺った。



大学入学者選抜改革



文部科学省 平成29年7月13日公表資料より

大学入学共通テストにおける英語試験とは？

文部科学省が2017年7月に公表した「大学入学共通テスト実施方針」では、「英語の4技能評価」について、「高等学校学習指導要領における英語教育の抜本改革を踏まえ、大学入学者選抜においても、『読む』『聞く』『話す』『書く』の4技能を適切に評価するため、共通テストの枠組みにおいて、現に民間事業者等により広く実施され、一定の評価が定着している資格・検定試験を活用する」とされた。そして、資格・検定試験については、大学入試センターが一定の参加要件を満たしていると確認した試験の受験結果とCEFR（ヨーロッパ共通参照枠）の段階別成績表示を要請のあった大学に提供するものとしている。さらに、大学入試センターが作問・実施する英語試験は、民間の資格・検定試験の実施・活用状況等を検証しつつ、2023年度までは実施し、各大学の判断で共通テストと民間試験のいずれか、または双方を選択利用することが可能となり、各大学は、これらの試験の活用や個別試験により英語4技能を総合的に評価するように努めることが示された。

4技能を評価する民間試験を活用することを踏まえ、大学入試センターが作問・実施する英語試験では、マークシート方式の筆記（リーディング）テストとリスニングテストを行うことが検討されている。

「現行のセンター試験は2日間で58万人が受験しています。短期間での採点が求められる現状を踏まえれば、センターが4技能全てを評価する形式はとりにくい。そこで、民間試験の活用を

前提としつつ『読むこと』『聞くこと』の評価を想定しています」と、大学入試センターの大杉住子審議役は話す。そして、「2020年度からの実施に向けて、作問や実施上の課題を検討する試行調査（プレテスト）を実施しました」と述べた。

言語使用の場面、状況、目的を意識した試行調査の作問

試行調査はすでに2017年11月に国語、数学、地歴・公民、理科が実施されているが、英語は、2018年2月13日から3月3日にかけて、高等学校および中等教育学校の協力校が任意の日程で実施した。参加したのは全高等学校・中等教育学校の約3%にあたる158校で、2年生（中等教育学校含む）6,720人が受験した。

実施内容は、筆記（リーディング）80分と、リスニング（バージョンA）30分、リスニング（バージョンB）30分となった。リスニングは、バージョンAとBの2つのグループに分かれて実施され、Aは全ての問題で問題音声で2回流れる方式で、Bは問題音声で1回流れる問題と、2回流れる問題が混在する方式（第1～2問は2回読み、第3～6問は1回読み）とされた。

実施にあたり、大学入試センターでは「英語で求められる『読むこと』『聞くこと』の能力をバランスよく把握するため、筆記（リーディング）については、必要な情報を整理する力や談話構成を理解する力、要約する力等を、リスニングについては、複数の情報を比較して判断したり、議論を聞いて要点を把握したりする力等を評価することをねらいとした作問を

工夫し、問題の構成や数、内容、音声回数等について検証を行う」と示している。

筆記（リーディング）の出題の特長について、大杉審議役は、英語指導への影響が指摘されている発音・アクセント・語句整序といった「間接的に『話すこと』『書くこと』の力を問うような問題」は試行調査では出題せず、「読むこと」の力を評価することに特化した、と説明する。出題のレベルは、CEFRのA1からB1までの問題を組み合わせており、学校生活や日常生活など、実際のコミュニケーションを想定した明確な場面、状況、目的を設定することを重視しているという。

「たとえば、リーディングについては、授業などでプレゼンテーションやディベートをするなど、発話を想定した場面が設定されています。テキストを読んで事実や意見等を整理する力、テキストの構成を理解する力、テキストの内容を理解して要約する力等を問うことなどもねらいとしました。また、リスニングについては、アメリカ英語以外（イギリス人や英語を母語としない人）の読み上げも行いました。実際のコミュニケーションにおいて国際共通語としての英語の使用を考えた状況設定としています。また、音声の読み上げを1回と2回に分けて検証しているのも、コミュニケーションにおいて同じことを2回ずつ伝える場面は考えにくいこと、民間試験でもリスニングテストの読み上げは1回が主流であることを踏まえた対応です」

また、設問文が英語で表記されたり、当てはまる選択肢を全て選択させる問題が出題されたりなど、新たな出題形式が取り入れられたことも特長だ。

2017年度 試行調査（プレテスト）英語（筆記〔リーディング〕）問題より

第4問

In class, everyone wrote a report based on the two graphs below. You will now read the reports written by Ami and Greg.

A survey was given to people between the ages of 13 and 29. To answer the question in Graph 2, the participants were able to choose more than one reason.

Graph 1: Are You Interested in Volunteer Work?(%)

Japan	35.1	41.9	23.0
Korea	56.0	28.1	15.0
USA	61.1	26.4	12.5
Sweden	42.8	29.0	28.2

Yes No Undecided

Graph 2: Why Are You Interested in Volunteering?(%)

To help people in need	65.4	70.9	75.8
To make my community better	35.4	48.4	62.9
To meet new people	38.2	49.6	44.0
To gain advantages for school and work	14.8	21.4	31.9

Japan Korea USA Sweden

Ami Kitamura

I was surprised when I saw Graph 1 because the percentage of Japanese participants who are interested in volunteering was higher than I had expected. As far as I know, none of my friends are doing any volunteer activities. So, I think we should motivate students in Japan to do more volunteering.
In order to do that, it's important to consider the merits of doing volunteer work. According to Graph 2, 65.4% of Japanese participants said they are interested in volunteering because they want to help people in need. Also, the percentage of Japanese participants who chose "To meet new people" was the highest among the four countries.
I think more Japanese students should learn about the benefits of volunteering. Thus, for the school festival I plan to make a poster that says, "You can help people in need and make new friends at the same time!" I hope many students will see it and become more interested in volunteer work.

Greg Taylor

In the USA, volunteering is common, so I was not surprised that it has the highest percentage of people who are interested in volunteer work. Graph 2 shows that a lot of American participants answered they are interested in volunteer work because they want to help people in need. I think this reason is important because students would feel a sense of achievement by helping people.
However, I was shocked to see that only 35.1% of Japanese participants are interested in volunteer work. I thought it would be more common in Japan. According to the information in Graph 2, only a few participants in Japan recognize the advantages for school and work. I recently heard Japanese universities and companies now put more value on volunteer experience than before. If more students understand these advantages, I think their interest in volunteering will increase.
Students should do volunteer work for the following two reasons. First, helping people in need will give students a feeling of accomplishment. Second, volunteering will also provide them with advantages for their future career. Therefore, I will compose a newsletter about these two benefits of doing volunteer work, and distribute it to students at school.

— 18 —

— 19 —

大学入学共通テストと試行調査の関係【イメージ】

2018年2月

言語活動等をより重視した
問題で試行調査を実施

正答率等の分析を踏まえ
問題構成や内容を検討

2018年11月

大学入学共通テストに向け
大学を会場として試行調査
を実施

2019年度
状況に応じシステム等
のための確認テスト

2021年1月

大学入学共通テスト開始

大学入試センター 平成30年1月29日 公表資料より

日頃の学びの成果を評価する

問題構成・内容に

2018年3月14日には大学入試センターより、今回の試行調査の結果速報等が発表された。問題ごとに、問題のねらいや学習指導要領との整合性、CEFRレベル、主に問いたい資質・能力が明記され、正答率も示されている。大杉審議役は試行調査の結果について、「作問にあたっては、高等学校の先生方にご協力いただき、豊かな言語活動を実践している高等学校の授業を意識しました。問題を見ていただければ、高等学校での授業に基づく場面設定も多く取り入れられていることがお分かりになるかと思います。速報値からは、バランスのよい出題となり、B1の問題も含めて正答率は悪くない結果が見えています。さらに分析は必要ですが、日頃の授業の成果を問うことができたのではないのでしょうか」と述べる。

また、今回の結果に対して、中央教育審議会教育課程部会外国語ワーキンググループ主査を務めた、上智大学の吉田研作特別招聘教授（言語教育研究センター長）からは「読解、聴解というコミュニケーション力を測るのに妥当性の高いものとなっている」と、同主査代理を務めた、立教大学の松本茂教授（グローバル教育センター長）からは「これまで出題されていた、『話す力』『書く力』を間接的に測っている」とされていた問題を排除できたことを評価したい」といったコメントが大学入試センターに寄せられている。

なお今回、問題のねらいを公表した背景について、大杉審議役は、受験生や大学、高等学校との間で、大学教育の基礎力として育成すべき英語力とは何かを共有するきっかけになることを

期待しているという。高等学校の英語科教員に向けては、「今回の試行調査の問題や問題のねらいをご覧になり、学習指導要領が求めている言語活動の充実が入試にもつながるということ、あらためて捉え直していただきたいと思います。授業を通じて学んだ経験が評価されるということをご理解いただき、授業改善に生かしていただければ」と期待する。

ただし、今回の試行調査で出題された問題は、あくまでも検証のためのものであり、今回の問題構成や内容が、必ずしもそのまま2020年度からの共通テストで受け継がれるものではないという点で留意する必要がある。正答率等の分析を踏まえて、今後は問題構成や内容について検討し、次回の試行調査を2018年11月に実施する予定だ。

大学で求められる

基礎力を養うことが大切

2021年1月に実施される共通テストを受験するのは、2018年入学の高校1年生からであり、今年度の高校2年生、3年生は現行のセンター試験を受験することになる。だが、センター試験や各大

学の入学者選抜においても、すでに新たなねらいの問題が導入され始め、現行の学習指導要領に基づいた言語活動等の成果が問われているという点では、共通テストと同様である。

大杉審議役は「センター試験も毎年、問題を改善し、より質の高い問題を出題できるようにしてきました。そのような蓄積があるからこそ、今回、共通テストへの移行ができるのです。共通テストはこれから求められる資質・能力を測る試験として、日々の授業での学びの成果が評価されることになります。高等学校の先生方には、生徒の『何ができるようになることが重要か、何を伸ばしたらよいのか』を見極めていただき、卒業後の学習や生活に必要な基礎力を付けていただきたいと思います。高大接続改革や共通テストへの転換は、高等学校での指導と大学入学者選抜の作問、そして大学での教育が一体となって実現されるものです。大学受験を最終ゴールとするのではなく、生徒が社会へ出てからの底力となる基礎力を養い、その後の人生にもつながることを意識した指導の成果が最大限評価されるようにしていきたいと思います」と語った。

大杉 住子（おおすぎ・すみこ）

大学入試センター審議役。文部科学省において幼保連携改革、教育課程行政、大学改革、キャリア教育、国際教育協力など教育制度を中心に担当。2014年から同省初等中等教育局教育課程企画室長として学習指導要領改訂を担当し、2017年4月より現職。大学入学共通テスト作問に関する業務を担当。

32 | 英語情報 2018 Spring

英語情報 2018 Spring | 33

2018年度 TEAPおよびTEAP CBT試験日程と試験概要を公開

大学入学者選抜での外部の資格・検定試験を利用した入試制度で、TEAP (Test of English for Academic Purposes) を採用する大学が増加したことから、2017年度のTEAPの志願者数が大幅に増加した。2018年度のTEAPおよびTEAP CBT試験概要を紹介する。

【2018年度 TEAP 試験日程】

2017年度のTEAP志願者数は前年度から1万名以上増加し、前年度比176%となった。また、4技能形式での志願者が倍増して2万846名となり、受験者の4技能志向が顕著となった。このような状況を受けて、2018年度は年3回、20都道府県で開催する。

	試験日	申込期間	試験形式	開催地 (予定)
第1回	7月22日 (日)	5月14日 (月)～ 6月28日 (木)	4技能 (RLWS) 2技能 (RL)	20都道府県 北海道・宮城・秋田・茨城・群馬・埼玉・千葉・東京・神奈川・新潟・石川・長野・静岡・愛知・大阪・兵庫・広島・香川・福岡・熊本
第2回	9月16日 (日)	7月 9日 (月)～ 8月16日 (木)		
第3回	11月18日 (日)	9月10日 (月)～10月25日 (木)		

主な変更点	◆試験形式の変更	◆開催地の拡大
	近年の志願者動向を踏まえ、4技能 (リーディング、リスニング、ライティング、スピーキング) と、2技能 (リーディング、リスニング) の2パターンの試験形式とする。	12都道府県から、上記の20都道府県 (予定) に拡大する。

【2018年度 TEAP CBT 試験日程】

TEAP CBTは、従来のTEAPの「大学で学習・研究する際に必要とされる英語運用能力をより正確に測定する」というコンセプトを継承し、さらに、グローバルに活動するために必要とされる実践的な英語運用能力を複合的に測定するテストだ。スピーキングまでコンピュータで試験を実施することにより、英語での指示を解釈しながら操作を行うICT問題を導入し、より高度な思考力・判断力・表現力を問う問題を出題する。

2017年度においては、推薦・AO入試を含め、延べ15の国公私立大学でTEAP CBTが採用された。2018年度はさらに採用が拡大することが予想される。

	試験日	申込期間	試験形式	開催地 (予定)
第1回	6月17日 (日)	4月16日 (月)～5月24日 (木)	4技能 (RLWS)	11都道府県 北海道・宮城・埼玉・千葉・東京・神奈川・愛知・京都・大阪・兵庫・福岡
第2回	9月 2日 (日)	6月25日 (月)～8月 9日 (木)		
第3回	10月21日 (日)	8月13日 (月)～9月27日 (木)		

主な変更点	◆試験形式の変更	◆開催地の拡大	◆実施回数の増加
	4技能 (リーディング、リスニング、ライティング、スピーキング) パターンのみの試験形式とする。	2都道府県から、上記の11都道府県 (予定) に拡大する。	年2回実施から、年3回実施に増やす。

TEAP / TEAP CBTに関するお問い合わせ

TEAP 検索 英検サービスセンター TEAP運営事務局 TEL: 03-3266-6556 ※平日9:30～17:00 (土・日・祝日を除く)
http://www.eiken.or.jp/teap/

[高等学校での活用に]

TEAP「団体専用クーポン利用型申込」のご案内

TEAP受験者やTEAP採用大学の増加に伴い、TEAPの団体申込を希望する高等学校が増えている。2017年度より開始した「団体専用クーポン利用型申込」の方式を紹介する。この方式は、学校経費や公費助成を利用した支払いを可能としており、受験申込は個人で行い、受験料支払いを学校 (団体) が一括で行うというものだ。

学校 (団体) で一括支払い、公開会場で受験

TEAPの「団体専用クーポン利用型申込」は、受験申込を受験者個人が行い、受験料を学校 (団体) が支払うという方式だ。受験会場は一般の申込と同じで、全国20都道府県 (北海道・宮城・秋田・茨城・群馬・埼玉・千葉・東京・神奈川・新潟・石川・長野・静岡・愛知・大阪・兵庫・広島・香川・福岡・熊本) で実施している公開会場となる。団体受験責任者は必要な手続きを経たうえで、受験した生徒の成績データを取得し、管理・分析することができる。受験料は、学校経費や公費助成などを利用し

た支払いが可能であり、受験者が直接支払い手続きを行わずに受験できる。

「団体専用クーポン利用型申込」の利用を希望する場合の手順は次の通りだ。

「団体専用クーポン利用型申込」の手順

- ①英検協会宛に「団体受験申請書」を送付 (試験実施3～4カ月前)
- ②英検協会にて申請内容の確認後、「団体受験受け入れ」をご案内
- ③「団体受験受け入れ校専用クーポンコード (以下クーポンコード)」の発行。英検協会より団体へ伝達 (試験実施9～10週間前)
- ④団体にクーポンコードを受験希望者に周知
- ⑤申込受付期間中に、受験者各自でTEAPウェブサイトより、クーポンコードを利用して受験申込手続き

なお、申し込みに際しては、受験者が事前に各自でTEAPウェブサイトより「TEAP ID」を登録しておく必要がある。登録には、カラーの顔写真データ (6カ月以内に撮影)、メールアドレス、TEAP IDとして利用する6～12桁の半角英数字、パスワードを忘れた際に利用する「セキュリティ用の質問」を準備しておく必要がある。

「団体専用クーポン利用型申込」に関するお問い合わせは、公益財団法人 日本英語検定協会 英検サービスセンター TEAP運営事務局 (TEL. 03-3266-6556) へ。

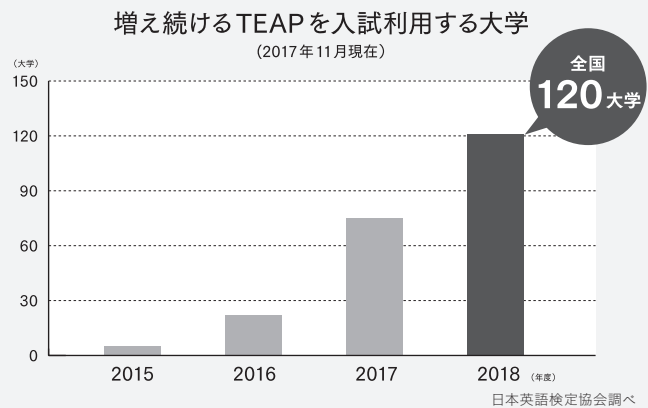
< 2018年度日程 >

	第1回	第2回	第3回
TEAP実施日	7月22日 (日)	9月16日 (日)	11月18日 (日)
団体申請期間 (予定)	3月26日 (月)～4月20日 (金)	6月4日 (月)～6月29日 (金)	7月30日 (月)～ 8月31日 (金)
クーポンコード引渡期間 (予定)	4月24日 (火)～4月27日 (金)	7月3日 (火)～7月 6日 (金)	9月 4日 (火)～ 9月 7日 (金)
申込受付期間	5月14日 (月)～6月28日 (木)	7月9日 (月)～8月16日 (木)	9月10日 (月)～10月25日 (木)

※TEAP CBTの「団体専用クーポン利用型申込」はございません。

TEAP採用大学も大幅に増加

2018年度入試では、全国で120大学がTEAPを採用しており、2015年度の5大学から大幅に増加した。2017年度入試から「一般入試 (英語4技能テスト利用型)」を導入した早稲田大学では、文化構想学部で70名、文学部で50名という大枠の定員を設け、2018年度入試の志願者数は文化構想学部1,319名、文学部931名にのぼり、そのうち、実用英語技能検定 (英検) とTEAPでの志願者数が9割程度を占めたという。



英検 2 級・準 2 級・3 級 ライティングテストを活用した 発信力の育成

Write more. Write well. Write it right!

第1回

まずは 3 級ライティングテストから

私は英語科教員の研修会などにお呼びいただくと、「Write more! (もっとライティングを!)」というスローガンで話を終えることが多くあります。そして、質疑応答の時間になると、「私は、高校でも大学でも、まして中学校ではまとまった文章を書くライティングも経験しないまま教員になりました。自分が習っていないことを、どのように教えていってよいのか不安です」という声がよく聞かれます。そんな先生方に向け、「大丈夫! ライティングは難しくないですよ。楽しいですよ」ということをお伝えしたく、この連載をすることになりました。

大井 恭子 (おおい・きょうこ)

清泉女子大学文学部英語英文学科教授。東京大学文学部英語英米文学科卒、New York 州立大学 Stony Brook 校大学院言語学科博士課程修了。博士 (外国語教授法)。専門は英語教育、応用言語学、クリティカル・シンキング。特にライティング能力の習得に関し、認知面と文化的背景という観点から外国語としての英語のライティング教育の構築をめざしている。

英検ではライティングが得点源

2016 年第 1 回検定から実用英語技能検定 (英検) 2 級に、そして 2017 年第 1 回検定からは準 2 級と 3 級にもライティングテストが入りました。それに伴い、今まで慣れてきた語句整序問題はなくなりました。採点は、「内容」「構成」「文法」「語彙」という 4 つの観点ごとに 0～4 点の 5 段階で評価され、ライティング部分の得点の満点は 16 点です。これを英検 CSE (Common Scale for English) スコアに換算すると、2 級は 650 点、準 2 級は 600 点、3 級は 550 点となります。英検 CSE スコアの場合、各 4 技能の得点は全て均一に配点されています。実際のところ、リーディングでの複数の問題と、1 問だけのライティング問題とは、同じだけの配点があるということです。ということは、実は、英検ではライティング問題をしっかりと書くことさえできれば、一大得点源 (!) になると言えるのです。ここでは、英検でよく出題されるライティングテストに習熟し、その方略を身に付け、生徒たちに自信をもって英検の問題に取り組ませましょう。

まとまりのある文章を書く

3 級を受験するのは中学生が多いことと思います。しかし、中学生にとっては、これまで一文単位で英文を書いた経験はあっても、**まとまった文章**を書くということには不慣れかもしれません。現行の学習指導要領では、「内容」(1) 言語活動の「エ 書くこと」に、「(オ) 自分の考えや気持ちなどが読み手に正しく伝わるように、**文と文のつながり**などに注意して文章を書くこと」とあります。また、2021 年度から中学校で施行される新学習指導要領においては、「目標」の「(5) 書くこと」に、「イ 日常的な話題について、事実や自分の考え、気持ちなどを整理し、簡単な語句や文を用いてまとまりのある文章を書くことができるようにする」とあります。「**まとまりのある文章**を書く」ということは、一文一文のつながりを考えるだけでなく**文章全体として一貫性のある文章**、すなわち「**パラグラフ**」を書くことが求められていると言えます。

3 級ライティングテストとその取り組み方

では、実際の英検 3 級ライティングテストについて検討するなかで、「一貫性のある文章とはどういうものを指すのか」を考えてみましょう。英検のホームページには、「Dr. Write の英検 3 級ライティングテストに挑戦!」という大変有益なライティング問題用教材があります。これを利用して 3 級のライティングテストとその注意点を見ていきましょう。

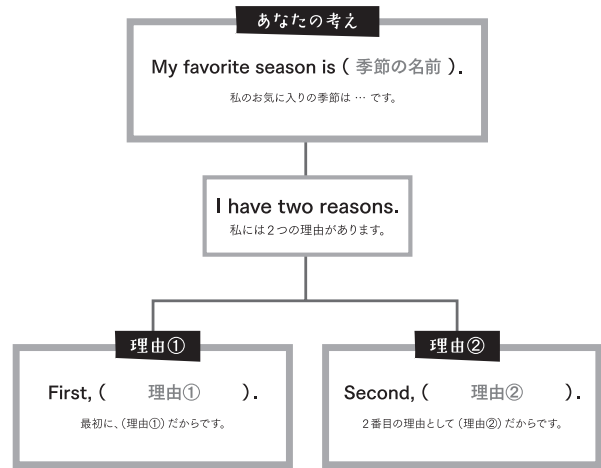


英語情報
AR で教材が
見られます

サンプルとしては次のものが用意されています。

あなたは、外国人の友達から以下の QUESTION をされました。
QUESTION : What is your favorite season?
・ QUESTION について、あなたの考えとその理由を 2 つ英文で書きなさい。
・ 語数の目安は 25 語～35 語です。 (以下略)

Dr. Write の教材では、「答えの型を覚えましょう」ということで次のような図を示しています。



このような流れに沿って、自分の考えを英語で書いてみましょう。そして、書いたものをチェックするために、英検のライティングテストの採点基準に沿った次の 4 つの観点 (①内容 ②構成 ③語彙 ④文法) からチェックすることが大切です (詳しくは右の QR より英検 HP でご確認ください)。



- 観点 1** 内容: 課題で求められている内容 (考えとそれに沿った理由) が含まれているかどうか。
- 観点 2** 構成: 英文の構成や流れがわかりやすく論理的であるか。
- 観点 3** 語彙: 課題にふさわしい語彙を正しく使えているか。
- 観点 4** 文法: 文構造のバリエーションやそれらが正しく使われているか。

これらのチェック項目は、正直に言って 3 級受験者が自力で確認するのは難しいと思われるので、英語科教員がこれらの項目を参照して、生徒たちが書いたものをチェックしていただきたいと思います。

一番気を付けなくてはならないのは、**観点 1** 内容の、「問われている内容に答えているか? 関係のない内容を書いていないか?」という点です。例えば、次のような文章は問われていることと関係ないと判定され、0 点になる可能性があります。

I like winter the best. One of my friends likes winter, too. I can understand it. He likes skiing. He goes skiing in Nagano with his family every winter. I like spring, too. Sometimes, I think summer is nice. I like watermelons.

つまり、最初の文 (topic sentence) で「私は冬が好き」と書いておきながら、「友達は冬が好き」「私は春も好き、夏も好きかも」というように筆が滑っています。こうした文章を「一貫性がない文章」と言います。英語のパラグラフにおいては、最初の文 (topic sentence) で述べたことを受け、以下に続く文はそれを支持するものをもってこななければなりません。左の図を見て、パラグラフの構造を確認してください。
一貫性がない文章として次のような例もあります。

My favorite season is summer. There are two reasons. First, summer has many sunny days, so we can play outside. Second, it is so nice to swim in the pool in summer. But I don't like the hot weather, so I like winter better than summer. In conclusion, I like summer the best.

これは、文法的にも正しい文で、しかも理由も 2 つしっかり述べられています。それなのに、「暑い季節が嫌い」「夏より冬が好き」といった「夏が好き」と矛盾する内容が続いています。これは論理的一貫性がないと判定されます。同じパラグラフ内では、あくまで、topic sentence で述べたことと歩調を合わせるような文が続いていなければなりません。

もう 1 つ、0 点と採点されそうな例を見てみましょう。

My favorite season is spring. It is because I like it.

これは、理由が 1 つしかありませんし、そもそも理由になっていません。“I like the warm weather in spring.” “We can enjoy cherry blossoms in spring.” のように、春が好きな理由として内容をふくらませることが大切です。それに、語数が目安の 25～35 語に比べ、少なすぎる (11 語) のもマイナス要因です。

人によっては、左の図にあるように、「型」にはめられた書き方だと自由な思考が妨げられると考える人がいますが、英語のパラグラフである限りは、そのルールにのっとって、one paragraph, one idea、そして論理的一貫性 (coherence) というものが守られる文章を書くことが求められています。

観点 2 構成という点では、「型」を意識して書くことが一番大切ですが、文と文との接続がスムーズにいくように「つなぎ言葉」を適宜使い、読み手に文章の流れがよく伝わるようにするのも大事なことです。

おわりに

今回例示した “What is your favorite season?” のような問いは、実際の英語でのコミュニケーションの場面でも、よく話題になるトピックです。このようなトピックについてのライティングで思考の流れを整理することを体得すると、それはほかのトピックが与えられたときにも、またスピーキングにおいても役立つ力となることでしょう。

参考文献: 大井恭子 (編著) 田畑光義・松井孝志 (著) 『パラグラフ・ライティング指導入門』 (大修館書店)

大学入試改革を踏まえた新しい英語教育の方向性を考える

「英語教育セミナー in 東京2017」を開催

公益財団法人日本英語検定協会（英検協会）は毎年12月下旬に、中・高等学校の英語科教員や各都道府県・市区町村の教育委員会など、英語教育関係者を対象に「英語教育セミナー in 東京」を開催している。英語教育改革や高大接続改革が進むなかでの開催となった2017年12月のセミナーでは、中・高等学校での実践発表をはじめ、講演、パネルディスカッションなどを通じて、これからの新しい英語教育の方向性を考える1日となった。

中・高の教員が実践発表

今回のセミナーは、東京都千代田区のヤフー株式会社内のセミナールームにて開催された。

まず、「4技能習得を踏まえた私の授業」と題した実践発表があり、新潟県立新発田高等学校の根立望先生が発表した。2017年11月の全英連新潟大会でも授業実演を行った根立先生は、生徒との親和関係を大切にしながら、常に生徒の英語を話そうとする気持ちに寄り添う姿勢を貫いた授業を展開している。

「生徒が自己表現活動を楽しむ授業づくりと教師の役割」をテーマに掲げたこの日の発表では、自身が授業をつくるうえで大切にしているポイントを7つ挙げ、生徒が自分の考えを伝えることやクラスメートの考えを聞く、という「自己表現活動」を中心に据え、生徒の思考力と表現力を高めることをめざしていると強調した。そのために生徒たちには、①英語の授業は英語を使う場にしよう、②嫌なことや気分の乗らない日もあるけど、英語の授業には持ち込まない、③友達のために英語を使おう（私もみんなのために英語を使うよ）——という授業規律を定め

ている。このような授業を通じて、生徒たちは英語に対する自信を付け、英語の授業を楽しんでいることが、授業の感想や生徒へのアンケートなどから分かったという。また、過去6年間で実用英語技能検定（英検）受験者数と合格者数は年々増加しており、準1級に挑戦する生徒も毎回出るようになり、生徒に主体的に学習する姿勢が身に付いていることがデータからも紹介された。

根立先生は最後に「英語の授業では、文化比較、国際支援、IT、人種問題、環境問題など多様な題材を通じて、生徒が世の中で起きているさまざまな出来事と出会い、自己表現活動をしながら言語コミュニケーション能力を高めることができます。目の前にいる生徒たちがより良い人生を送ることができるよう、明日からみんなで一緒にがんばりましょう!」と呼び掛けて発表を終えた。

中学校の実践発表者は、長野市立長野中学校の小泉一輝先生が務めた。小泉先生は、英検協会の教員海外研修に参加し、アメリカ・モンタナ州立大学で、第二言語習得理論に基づいた英語指導の研修を受けた経験をもつ。「僕的! Before → After 3つのターニングポイント」と題して発表し、自身が授業改善に取り組んだきっかけから、生徒が自ら学ぶ授業づくりなどを紹介した。小泉先生は2003年から2011年までの間は、「生徒がやる気



長野市立長野中学校
小泉 一輝 先生

になる授業」や「英語が楽しいと思える授業」をめざしながらも、実際には、教師中心の授業だったと振り返る。そのなかで、信州大学附属長野中学校勤務時に、学校の研究テーマに沿って、他教科が関わる研究体制を組み、1人の生徒の成長を追い、単元を見通して評価をするといった研究に取り組んだ。そして「研究を通じて気付いたのは、生徒の興味も学び方もさまざまであり、誰もができるようにしたいと望んでいることだった」と述べた。さらに、モンタナでの研修によって、さまざまな子供の特徴に応じた活動と手立てが必要であることを学び、その後に着任した公立中学校では、タブレットを使った生徒の言語活動を通じて、子供を“みる”ことを深めていったという。2017年4月には県内公立校3校目、市内初の公立中高一貫校である市立長野中学校が開校し、着任。生徒のInteractive Talkなどを取り入れた授業を実践している。生徒中心、言語活動中心の授業を通じて、生徒に自ら学ぶ姿勢と自信が育まれていることを紹介した。

教員海外研修での学びを生かして

続いては、2017年度の教員海外研修に参加した北海道・美幌町立北中学校の桑原真理子先生が、帰国後の実践報告を行った。2週間にわたるオーストラリアでの研修に参加したきっかけ、研修を受けて学んだこと、さらに帰国後に実践していることなどを発表した。

ブラジル・サンパウロの私立学校でブラジル人に日本語を教えた経験をもつ桑原先生は、同校で出会った先生に「日本語には平和を育てるための言葉が多く存在する。そうした言葉が日本人の心を育てる。日本語を通して、日本人の心を知ることができるから、日本語を教えている」と言われたことをきっかけに、自分が英語を教える意味を見つめ直したという。そして、海外研修に参加して、自分の英語の授業のあり方を考えようと応募した。研修で学んだelicitingとconcept checkingは帰国後の授業づくりですぐに実践し、生徒に問い掛けながら、生徒自身の考えを引き出し、内容を理解できているのかを確認している。また、研修で自らが学習者として授業を受けることで、「教員の役割とは、生徒の

学びを支え、生徒が間違いや失敗を恐れずに挑戦できる人間関係を築くこと」とであると、講師から学んだという。そして、そのような教員になり、授業をつくることこそが、自分が英語を教える意味なのだと思感したと述べた。

最後に「チャンスは誰にでも平等にある。挑戦すれば、そこには出会いがある。知識もチャンスも使わなければ、ただ失うだけ。Use it or lose it!」と会場に投げ掛けて、発表を終えた。

国がめざす新しい英語教育の方向性が示された

文部科学省初等中等教育局国際教育課より、外国語教育推進室長の金城太一氏も登壇し、英語教育改革の目的と現状、次期学習指導要領のめざす教育の方向性を解説した。金城氏は日本が置かれる現状や諸外国における外国語教育に触れながら、英語教育改革の背景を紹介。そして、「平成26年度 小学校外国語活動実施状況調査」の結果から、「子供たちは英語を好きだとしながらも、中学校での英語教育では子供の学びたい意欲に応えられていない」との課題を指摘した。そのうえで、「英語教育実施状況調査から、中学生・高校生の英語力は国が掲げる目標に達していないが、中学生で英検3級、高校生で準2級以上を取得した生徒の割合は増加傾向にある」と述べ、「授業での言語



文部科学省 初等中等教育局 国際教育課
外国語教育推進室長 金城 太一 氏

活動の質を高めることが大切」と強調した。また、次期学習指導要領の改訂についても言及し、小学校の外国語活動や外国語科について、移行期間に使用する新教材を交えて示した。最後には「外国語教育の成否を握るのは中学校であり、外国語の授業を生きた時間にするために、中学校の先生方は授業改善を一層進めてください。高等学校の先生方は、主体的・対話的で深い学びや、言語活動を軸にした授業を進め、他教科をけん引してください。行政関係者の方々は、学校種を越えた連携を円滑に図る仕組みづくりに取り組んでください」と投げ掛けて講演を締めくくった。

英語教育改革への熱意が会場にあふれた

さらには、一般財団法人実用英語推進機構代表理事の安河内哲也先生による基調講演とパネルディスカッションが行われた（詳細内容は次ページ）。長時間にわたるセミナーは、会場が一体となって英語教育改革を推進していこうという高揚感に包まれて幕を閉じた。



新潟県立新発田高等学校
根立 望 先生



北海道 美幌町立北中学校
桑原 真理子 先生

英語教育セミナー in 東京 2017・パネルディスカッション

「グローバル人材の育成、英語教育改革、入試での外部試験活用」



「グローバル人材」を育てるために

吉田 本日は「グローバル人材の育成」「英語教育改革」「入試での外部試験の活用」をテーマに考えます。皆さんが捉える「グローバル人材」とは、どのような人でしょうか。

太田 「グローバル人材」という表現の解釈は、さまざまだと思います。世界を飛び回って活躍する人をイメージする人もいらっしゃるでしょう。一方、「グローバル」が、globeの形容詞であることから考えると、地球規模の視点から物事を考え、行動する人、つまり、持続可能な地球をいかに構築するかという視点から考え、行動する人だとも言えます。また、人を取り換え可能な物として扱っているとして「人材」という表現を嫌う人もいますが、人材は、英語ではhuman resourcesと表現します。つまり、「資源」を意味しています。resources（資源）は、人のために役立つものであると考えれば、グローバル人材とは「自分が身に付けた知識・技能を持続可能な地球のため、そして人のために役立たせることができる人」であると言えます。私たちの扱う英語は、社会や世界とつながる窓口となります。英語教育という視点から考えると、「グローバル人材」とは、英語の知識や技能を用いて、globallyにであろうとlocallyにであろうと積極的に世界と関わり、持続可能な地球の発展のために貢献しようとする志をもった人だと考えることができます。

高野 日本人にとって今、何が大事なのかを考えるなら、「英語などの言語を使いながら、自分の思いを語るができる」ということだと思います。そのためには、単に英語の使い手を育てるだけでなく、「世界の人々と対等にわたり合っていくための資

質・能力をもった人材」を育てていくことが必要です。

安河内 グローバル人材とは単に英語が話せて、世界中を飛び回っている人のことではありません。地域社会や各国の文化への深い理解をもつ人を指すのではないのでしょうか。自分を育ててくれた日本の文化を理解し、文化に対する愛情をもって、世界と接する態度を養うことが大切だと思います。いろいろな国を旅してみている感じるのは、私たちが日本文化を愛するように、世界の人々も自国の文化を愛しているということです。グローバル人材とは「各国の文化への尊敬を抱きながら、世界と対することができる人」を指すのではないのでしょうか。

英語教育改革はなぜ必要なのか？

吉田 続いて、現在進行中の英語教育改革への期待や課題について、ご意見を伺います。

太田 残念ながら、日本の英語教育では現行の高等学校学習指導要領で「授業を英語で行うことを基本とする」と示されるまで、文法訳読中心の指導が行われてきました。英語の授業でありながらも、生徒も先生も授業の大半を日本語で過ごしてきたのです。これでは、英語によるコミュニケーション能力が身に付くはずはありません。生徒が、間違えながらも自分が得た情報や自分の考え、気持ちを伝え合う経験をしない限り、コミュニケーションの手段として英語を使えるようにはなりません。だからこそ、教師主体の授業から生徒主体の授業へ、つまり、説明中心の授業から生徒の言語活動中心の

授業へ変える必要があるのです。

高野 昭和40年代頃から、当時の文部省は日本の英語教育を変えるためにさまざまな検討会をつくりました。しかし、その当時と今回の改革では、相当な違いがあると感じています。今回は高大接続改革も同時に進み、大学教育や大学入試まで全てが一体化された、スケールの大きな改革案が示されました。2013年に閣議決定された「第2期教育振興基本計画」では、2017年度までに英語力を中学3年生では英検3級程度以上を50%、高校3年生では英検準2級程度～2級程度以上を50%まで到達させ、教員の英語力は英検準1級程度以上との目標が示されました。しかし、完成年度である2017年度においても、まだ目標達成には至りません。今回の英語教育改革を失敗に終わらせることのないよう、教員は真剣に対応していくべきだと思います。

安河内 日本の英語教育は、公教育と民間企業が支えています。公教育に携わる教員の皆さんが一生懸命変わろうとしているのを、民間企業が足を引っ張ってはなりません。例えば、教科書を作っているのは出版社、進路指導室にある入試用資料を作っているのは予備校・塾です。出版社や予備校には、既存の商品を廃盤にして、新しい商品を作るとコストも時間もかかるので、改訂せずに売り続けたいという気持ちが少なからずあるのではないのでしょうか。しかし、民間企業もここで重い腰を上げて英語教育改革をあと押しすべきです。

吉田 教科書作成における課題は、科目名にもあります。今後、高等学校の「英語表現」は「論理・表現」に、「コミュニケーション英語」は「英語コミュニケーション」に変

わります。これまで「英語表現」は英語の表現（文法）を教えればいいと誤解されてきました。「コミュニケーション英語」では、コミュニケーションに必要な「英語」を教えればよいとした教科書が作られてきました。「英語」と「コミュニケーション」のどちらに重きを置くべきなのか。それは、英語による「コミュニケーション力」の方なのです。

太田 「英語表現」が目標にしているのは文法指導ではなく、表現力（話す力・書く力）と、批判的思考力や論理的思考力などの思考力の育成でした。聞き手や読み手に敬意を払い、相手に配慮しながら英語が使える人を育てようとしたのです。残念ながら、この趣旨は全ての学校には伝わらなかったようです。教室で英語を使う経験が良い経験であれば、多くの生徒が学校の外でも自発的に英語に関わろうとするはずです。生涯にわたり英語を学び続ける自律した学習者を育てるためには、間違えてもいい、失敗してもいいから、実際に英語を使いながら身に付けていくこと（USE English to learn it）の大切さを生徒たちに教える必要があります。そのため教師は、日頃から、英語を使うことへの生徒たちの不安を取り除き、活発な発話を引き出すようにしなければなりません。親和関係（rapport）の構築を意識した授業づくりが求められるのです。

安河内 授業改善には、英語を教える側のマインドセットの転換が重要だと思います。私たち日本人はノンネイティブスピーカーです。ですから、「先生も君たちも一緒に間違えながら上手になっていこうよ」という雰囲気教室をつくり、生徒の英語学習をあと押ししていく姿勢が必要だと思います。

大学入試はいかにあるべきなのか？

吉田 それでは、最後のテーマの「入試での外部試験の活用」について、皆さんにお話いただきましょう。

太田 試験については、次の4つの視点が大切だと考えます。Validity（妥当性）、Reliability（信頼性）、Practicality（実行可能性）、Washback Effect（波及効果）です。従来、英語のテストと言えば、Paper and Pencil Testsでした。入試もそうでした。そのことが学習者や指導者にどのような影響を与えてきたのか、そこに負のWashback Effectがなかったかどうか、を考えていただきたいと思います。試験のあり方が、英語の指導方法や生徒の学習方法を偏ったものにしてなかったか。本当に生徒の英語力を診断することができていたか。もし、評価に妥当性や信頼性、正の波及効果が担保されていなかったとしたら、生徒たちの本来あるべき英語学習やバランスの取れた英語習得につながる評価に改善することが、英語教育に携わる者の責任ではないでしょうか。入試に関して言えば、コミュニケーション能力の育成を目標とする高等学校外国語科の授業の延長線上に入試があれば、特別な入試対策など必要なくなります。社会の変化に応じて、生徒の学びが変わり、学校の指導が変わるなら、それらの変化に合わせて評価も、当然、変わらなければなりません。

高野 大学入試が変われば高校の学習が変わる、高校入試が変われば中学の学習内容が変わる。それは当たり前のことだと思います。このたび、国立大学協会が、2020年度から4年間は、大学入学共通

テストにおける英語の試験を2技能とし、外部資格・検定試験も活用するとしたことは、大学入試が変わる大きな一歩になったと思います。公平性や実施体制、試験方式など、残された課題はまだ多くあります。その課題を解決するなかで子供たちを犠牲にしてはなりません。高校入試について言えば、2017年12月には、東京都が都立高校入試にスピーキングを導入することを公表しました。ただし、スピーキングといっても、発表とやり取りの2つを本当に測ることができるのか、スピーキングだけを取り上げて、どのように制度設計をするのか、十分な検討が必要かと思います。スピーキングテストを導入することには大賛成ですが、スピーキングの1技能だけを測るのではなく、技能統合型の試験にするのがよいのではないかと思います。

安河内 今後は学習到達目標と指導、評価が一体化した形をつくっていかねばなりません。この改善が遅れるほど、子供たちの実力の伸びは鈍化していくのではないかと思います。ぜひ、民間企業も公教育も大学も、みんなで協力しながら改革を進めていきましょう。

吉田 今回の改革は、大学入試も含めて、これまでの日本の英語教育のなかでおそらく、一番大きな改革であると認識しています。長い間、英語教育に関わってきて、いろいろな問題がありましたが、ようやくここまでたどり着くことができたという思いを、パネリストの皆さんはおもちだと思います。改革を成功させるには、まだまだ皆さんの力が必要です。ぜひ一緒に、改革を推進していきましょう。

（文中敬称略）



東京都教育委員会が 「東京グローバル人材育成計画 ’20」を発表

東京都教育委員会は2018年2月、「東京グローバル人材育成計画 ’20 (Tokyo Global STAGE ’20)」を発表した。この計画により、東京都がめざす2020年度に向けたグローバル人材育成の目標の設定と目標達成への手段が明確に示された。首都・東京として、2020東京オリンピック・パラリンピック開催地として、どのような教育を展開していくのか。育成すべき人材像と具体的な施策について、東京都教育庁指導部の国際教育推進担当・瀧沢佳宏課長と国際教育事業担当・森晶子課長にお話を伺った。

三つの柱を踏まえて 打ち出された20の施策

経済、学術、文化などの分野を問わずグローバル化が進展するなか、東京都教育委員会は「東京や世界で、グローバル人材が活躍している未来像」を見据えつつ、「東京都教育ビジョン」で示した三つの柱をもとに、2020年度までの3年間をファーストステージとして、「東京グローバル人材育成計画 ’20 (Tokyo Global STAGE ’20)」を策定した。

この計画は、2013年6月に設置された「東京都英語教育戦略会議」による28の提言や、国が2013年12月に示した「グローバル化に対応した英語教育改革実施計画」による新たな取り組みを前提にしている。計画策定にあたり、東京都教育委員会では前述の三つの柱に対し、「取り組みの方向性」として、新たに①授業の質を高める、②学ぶ時間・機会を増やす、③学ぶ意欲を高め、学び続ける——の三つの視点を加えたうえで、20の具体的な施策を掲げた。

瀧沢佳宏課長は「本計画では、グローバル化や技術革新が進むなか、その舞台となる東京において、グローバル人材育成がどのような未来をもたらすかを教育の

東京都教育ビジョンで示した三つの柱

- ・「使える**英語力**」の育成
- ・豊かな**国際感覚**の醸成
- ・日本人としての**自覚と誇り**の涵養

観点から描いています。変化の激しい時代のなかで、日本のプレゼンスを維持し、さらに高めていくためには、グローバル社会を自ら切り拓き、世界を舞台に活躍できる人材を育成していく必要があります。これから学校教育が果たすべき役割はますます大きくなっていくでしょう。計画の名称に含まれる『'20』には、2020年度に向けた3年間の計画と、20の具体的な施策の2つの意味を込めています」と、計画策定の背景を説く。

従来の取り組みから 新規の取り組みまでを網羅

計画の具体的な施策を見てみよう。その内容は、「東京都英語教育戦略会議報告書」をベースに、新学習指導要

取り組みの方向性

- ①授業の質を高める
 - スピーキングを含めた4技能の伸長
 - 新学習指導要領への対応
 - 「主体的・対話的で深い学び」の実現
- ②学ぶ時間・機会を増やす
 - 英語の授業以外で学べる環境の創出
 - 興味をひくコンテンツの提供
 - 英語を使う必要性・必然性の創出
- ③学ぶ意欲を高め、学び続ける
 - 国際交流の飛躍的拡充・継続
 - 楽しさ・自信を体感できる環境整備
 - 目標を示し、チャレンジを支援
 - 自律的・継続的な学習者の育成

領などの要素も組み込み、これまでの取り組みから今後の取り組みまでを網羅している。また、計画全体の目標と事業ごとの個別目標が設定されている。

「東京グローバル人材育成計画 ’20」策定に携わった皆さん

国際教育推進担当
渡邊 貴志 課長代理

国際教育推進担当
瀧沢 佳宏 課長

国際教育事業担当
森 晶子 課長

国際教育推進担当
佐藤 佳代子 課長代理

「東京グローバル人材育成計画 '20 (Tokyo Global STAGE '20)」の体系図

	三つの柱を踏まえた20の施策	三つの柱		
1	小学校英語の教科化等への対応	英語力		
2	中学校における「わかる」「使える」を実現する英語授業の推進	英語力		
3	教員の英語力・指導力の底上げ	英語力		
4	最新の英語教授法の習得	英語力	国際感覚	
5	ネイティブ・スピーカーの活用による授業改善	英語力	国際感覚	
6	授業改善に向けた4技能評価の導入	英語力		
7	英語での実践的な発話を体験	英語力	国際感覚	自覚と誇り
8	ICTを活用したスピーキング能力の向上	英語力		
9	日常的に英語を使用する校内環境の整備	英語力	国際感覚	
10	日本や東京の文化・歴史等を英語で発信できる力の育成	英語力	国際感覚	自覚と誇り
11	持続的な国際交流の推進		国際感覚	自覚と誇り
12	「世界ともだちプロジェクト」による交流		国際感覚	自覚と誇り
13	同世代の外国人と交流できる環境の整備		国際感覚	自覚と誇り
14	海外留学への支援	英語力	国際感覚	自覚と誇り
15	国際貢献意欲の育成		国際感覚	
16	「国際バカロレア」の取組		国際感覚	
17	国際色豊かな学校の拡充		国際感覚	
18	都立高等学校入学者選抜英語学力検査の改善	英語力		
19	海外大学進学希望者への支援	英語力	国際感覚	
20	英語以外の外国語学習の充実		国際感覚	



「他道府県との連携が不可欠」と語る瀧沢課長

例えば、「教員の英語力・指導力の底上げ」については、「指導力・英語力向上研修」や「外部検定試験を活用した指導力の向上」などに取り組むほか、「最新の英語教授法の習得」のためには、すでに2014年度より「教員の海外派遣研修」を実施している。

「東京都の先生方の英語力は基本的に高めではありますが、学習指導要領に基づいた授業改善に取り組むにあたっては、今後さらに指導力を高めていくことが求められます。生徒にいかに関言語活動に取り組ませるか。そのために先生方にはファシリテーターとしての役割を担ってほしいと思います。パフォーマンステストの指導者用DVDや、都独自の英語教材『Welcome to Tokyo』の指導資料を作成・配布しています。実践を積み、さらに英語力・指導力を高めていただきたいと考えています」と瀧沢課長は述べた。

児童・生徒が英語を使って活動する体験型施設を開設

児童・生徒が「英語での実践的な発話を体験」する場として、2018年9月には、東京都英語村「TOKYO GLOBAL GATEWAY (TGG)」が江東区青海にオープンする。小・中・高校生を主な利用対象とし、海外のような擬似空間・施設で英語漬けになり、さまざまなプログラムを通じて、リアルなコミュニケーションを体験する施設だ。

森晶子課長は「TGGでは、日常生活を題材にミッションを解決する『アトラクション・エリア』と、世界的な課題や実社会を体感し、英語で議論しながら探究的にグループ・ワークを行う『アクティブイマージョン・エリア』に分かれて活動します。小学生から高校生まで、発達段階や英語のレベルに応じたプログラムが用意され、利用者8名に1名のイングリッシュ・スピーカー(エージェント)が付いて行動を共にします。子供たちが文法や発音などを躊躇せずに英語を使って活動する楽しさや必要性を体感できる場とし、『生きた英語』をふんだんに発話し、世界に目を向けるきっかけになることを目的としています」と設置の趣旨を述べる。

TGGは官民連携によって運営され、整備・運営を主体的に行う(株)TGGのほ

か、国際機関や企業、海外の団体等と連携する。プログラムの開発にあたっては、英語教育の専門家の知見を生かし、CLIL(内容言語統合型学習)の考え方を取り入れた。個人利用も可能だが、学校単位での利用を主としている。

「このような連携体制のもとで運営できるのは、さまざまな国際機関や企業が集まる東京ならではのメリットです」と強調する森課長。「利用者は都内の児童・生徒に限定していませんので、修学旅行などで東京にいらっしゃる際にもご利用いただければと思います。英語の授業や総合的な学習、学校行事などでぜひご利用いただきたい」と利用を呼び掛けた。

学校間の国際交流を深めるための支援

学んだ英語を実践的に使い、豊かな国際感覚を醸成するために、「**持続的な国際交流の推進**」や「『**世界ともだちプロジェクト**』による交流」の施策もある。

多くの都立学校が国際交流の意義を認めながらも、十分には進んでいないのが実情であることから、都として交流活動を支援・促進しているという。学校が自発的に交流相手校と交流する際の支援に加え、教育に関する覚書を締結している国・地域をはじめとする海外の教育行政機関と連携し、海外の学校とマッチングも行っている。また、今後は国際交流を促進するため、交流可能先の情報提供や学校からの相談対応などを行う「国際交流コンシェルジュ」を創設し、各学校のニーズに応じたきめ細やかな支援をしていくという。

「世界ともだちプロジェクト」は、2020東京オリンピック・パラリンピックに向けて、児童・生徒が世界の複数の国について、まず調べ学習を行う。さらに、「**同世代の外国人と交流できる環境の整備**」も充実させ、留学生の受け入れを促進する。この施策はすでに2017年度にも行っており、オーストラリア、ニュージーランド、カナダ、アメリカ、タイの中高生

91名をそれぞれ12日間ずつ、都立高等学校で受け入れた。留学生は、日本の同世代の生徒たちと触れ合いながら、清掃や部活動といった日本の学校特有の活動を体験したり、日本文化のワークショップをしたり、都内にある企業を訪問したりするなど、東京の魅力を肌で感じたという。2018年度は100名の受け入れを予定している。

「海外留学は誰でもできるものではありませんので、このような施策を充実させることで、学校にしながら国際交流ができる機会を広げていきたいと思います」と森課長は話す。

生徒の海外留学への機運を高める

生徒の「海外留学への支援」の機会としては、2012年度より実施している都立高校生を対象とした「次世代リーダー育成道場」を継続する。プログラムは、国内事前研修と留学、国内事後研修によって構成されている。事前研修では、留学に必要な語学力、問題解決能力、チャレンジ精神などを高めるとともに、日本の歴史や伝統・文化への理解を深める。学んだ成果をもって留学にチャレンジし、さらには帰国後の事後研修で、留学での経験や学びを振り返り、成果発表会やパネルディスカッションを通じて、成果を共有することで、留学の機運を高めることを目的としている。

瀧沢課長は「次世代リーダー育成道場の修了生たちからは、事前研修や留学を通じて、多様な問題に触れて視野を広げたり、日本と世界のつながりを多



「既存の枠組みを超えた取り組みを進める」と森課長

様な角度から学び、日本の立ち位置を理解したりすることができた、といった声が上がリ、一定の成果が生まれています。今後も留学フェアを開催し、ホームページで情報提供を行うなど、生徒の海外で学ぶ意欲を高めていきたいと思

4 技能評価の重要性を意識

また、生徒の英語4技能を伸ばし、適切に評価するためには、授業改善が必要であり、東京グローバル10や英語教育推進校における「4技能を測定する外部検定試験のさらなる活用」を進めていく。各指定校では、4技能をバランスよく指導して、技能統合型の言語活動を重視した授業改善を図り、生徒の英語力を適切に評価するために、外部検定試験を活用する。この施策について、瀧沢課長は「これらの過程で得られた知見は、ほかの都立高等学校等へ波及させ、都立高等学校等全体の英語力の底上げを図りたい」と期待を込めて語った。

さらに、「都立高等学校入学者選抜英語学力検査の改善」として、4技能評価を取り入れた英語学力検査の導入を予定している。現在、「話すこと」の評価のあり方や導入に伴う課題などを検討しており、2018年度には実施に向けた問題や採点方法、運営方法などの具体的な内容について、フィージビリティ調査を実施するという。

「小・中学校において、4技能をしっかり指導していただいている成果を、入試で適切に評価することは、都立高等学校に課された責任だと言えます。学習指導要領が改訂され、授業での言語活動がさらに充実していきますし、高大接続改革によって、大学入試での外部検定試験を活用した4技能評価も導入が予定されています。4技能の育成は大きな課題であり、都教委としても都立高等学校入試でその責任を果たしていきたいと考えます」と瀧沢課長は力強く述べた。

日本全体で英語教育改善に取り組むために

「東京グローバル人材育成計画‘20」で掲げている「育成すべき人材像」とは、「社会や世界の動きを見通し、自ら人生をたくましく切り拓く人材」や「日本の未来を担い、東京の発展を支え、リードする人材」だ。

また、計画の具体的な数値目標としては次のように示している。

1. 生徒の英語力

	2017年度	2020年度
英検3級程度(CEFR A1に相当)の英語力を有する中学生(卒業時)の割合	51.6%	60%
英検準2級程度(CEFR A2に相当)の英語力を有する高校生(卒業時)の割合	38.3%	60%

2. 教員の英語力

	2017年度	2020年度
英検準1級程度(CEFR B2に相当)以上の英語力を有する中学校教員の割合	48.0%	65%
英検準1級程度以上の英語力を有する高等学校教員の割合	72.6%	80%

3. 国際交流

	2020年度
都内公立学校における国際交流の実施	100%

これらの目標を実現していくためにも、「既存の枠組みを超えた取り組みを実験的に進めていきたい」と話す森課長。例えば、TGGのプログラム等を通じて他教科の内容を英語で教える取り組みの参考にしてもらいたいと言う。そして、「次代を担うグローバル人材育成に向けて、他者と協働する力を育むことは重要だと思います。国際交流など体験的オープンエンドな活動を推進していきたいと考えています」と述べた。

最後に、瀧沢課長は「東京都に限らず、各都道府県で打ち出しているグローバル人材育成に向けた施策が最終的にめざす方向は同じはずです。日本の英語教育を改善するには、他道府県との連携が不可欠です。今回の計画を東京都がパイロット的に取り組み、その成果や課題を共有し、それぞれの地域性に合う施策を展開していくことができたと考えています」と、今後の展望を語った。

専門学科の生徒たちが学びの成果を英語で発表

「第3回 宮崎県高等学校英語プレゼンテーションコンテスト」を開催

宮崎県では専門学科をもつ県立高等学校の割合が半数を占め、他都道府県に比べると多い。

宮崎県高等学校教育研究会英語部会（宮崎県高英研）プレゼンテーション研究部は、

「宮崎県高等学校英語プレゼンテーションコンテスト」を開催し、専門学科の生徒が学びの成果を英語で発表する機会を通して、

コミュニケーション能力の育成と英語学習への興味・関心を高めることをめざしている。

※文中の肩書き等は取材当時のものです。

自分の学びを伝えるために英語を使う

2018年1月、宮崎市内の県立図書館研修ホールで開催された「第3回宮崎県高等学校英語プレゼンテーションコンテスト」（実行委員長・県立日南振徳高等学校 富高雅代指導教諭）には、9校12チームの約50名が出場した。開会に先立ち、宮崎県高英研の宮野原章史会長（県立延岡高等学校長）は、「県教育委員会が開催していた頃から数えると、今回は通算6回目であり、県立高等学校の専門学科の生徒が英語でプレゼンテーションを行う、全国でも珍しい大会です。英語力やプレゼンテーション能力は、社会でも必要とされる力となります。日頃の学びの成果を披露する場として、皆さんの発表を楽しみにしています」と述べた。

県教育委員会学校政策課 高校教育・学力担当の長友美紀指導主事は「グローバル社会において、英語は世界の共通言語です。皆さんは専門的なことを学んでいるという強みがあります。それを世界に伝えるツールとして英語を使って発信してください。今日はそのきっかけとなる大会です。このような大会が全

国へと広がることを期待しています」と会場に呼び掛けた。

各チームが趣向を凝らして発表

各チームとも、プレゼンテーション（8分以内）と質疑応答を行う。提示資料も含めて英語を使用し、プレゼンテーションソフト、動画、ポスター、写真、紙芝居などを利用するほか、実演や制作物の提示なども認められている。審査基準は①内容②英語運用③提示効果④協力⑤時間——とされ、合計20点満点で審査する。

トップバッターを務めたのは、宮崎海洋高等学校海洋科学科だ。白衣姿で登場した生徒たちは、実演を交えながら微生物や食物連鎖について発表した。宮崎農業高等学校食品工学科は「微生物のおかげで私たちはおいしい食品を食べることができる」と、イーストを入れたパンが大きく軟らかいことなどを、実物を示して伝えた。日南振徳高等学校経営情報科は、クルーズ船の来航時に外国人観光客をガイドした様子を実演した。妻高等学校福祉科は、自ら編集した動画を通じて、クイズを交えながら学

校や学科の学びを紹介した。佐土原高等学校情報技術科は、自作の料理レシピ情報アプリを披露し、64のレシピから1クリックで家族の人数に応じた材料と分量が表示される仕組みを紹介した。

富島高等学校生活情報科は、保育検定1級取得をめざした挑戦と、ピアノや歌の実演、折紙作品の披露などをした。また、同校国際経済科は、米国と韓国で流行している物品を文化祭で販売したところ、2チーム合計で11万円を超える売上に達したものの、コストを差し引くと赤字になったという。飯野高等学校生活情報科は、文化祭での手作り衣装によるファッションショーを動画で紹介し、実物を着用して見せた。

地域での販売実習を通じて学んだことを発表したのは、都城商業高等学校商業・経営情報科だ。生徒が店長、パイヤーなどの役割を担って店を運営する販売実習を通じて、学校での学びを地域へとつなぐ取り組みだ。日南振徳高等学校商業・経営情報科は、米国の高校生とのインターネットを通じた交流について紹介し、パソコンを使ってタイピングを実演した。宮崎農業高等学校生産流通科

は、野菜の育つ過程を紹介し、フードロスの問題の解決にどのように取り組むべきかと会場に投げ掛けた。最後に発表した本庄高等学校総合学科は、2年生と3年生が、ブルーベリーを使ったスイーツバトルを通じて、地域や大学の先生と連携して商品開発を行ったことを紹介した。

伝えたいことがあるから

英語が生きている

閉会式では審査結果が発表され、見事1位に輝いたのは、宮崎農業高等学校食品工学科だった。そして、妻高等学校福祉科が2位、宮崎海洋高等学校海洋科学科が3位となった。

審査員を代表して、宮崎大学大学院教育学研究科のアダチ徹子准教授は「言葉には意味があります。私たちは言いたいことが先にあり、それを伝えるために言葉を使います。皆さんも、自分たちの学びを伝えたいという思いがあるからこそ、聞く人にしっかりと気持ちが伝わったのです」と褒めたたえた。

最後に、文部科学省初等中等教育局の平木裕視学官は「今後は、皆さんの学校へ入学を希望する中学生に英語で学校紹介をする機会があれば、さらに伝える目的が明確になるでしょう」と述べた。そして、「覚えたことを言うのではなく、自分が伝えたいことをメモや資料を見ながら、自分の言葉で伝えることを意識しましょう。発表後の質疑応答ではどのように答えるのか、ほかのチームに対してどのような質問をするかなど、即興でやり取りできる力を伸ばしていくとよいでしょう」とアドバイスを送った。

県内4校の実践例から授業改善のあり方を探る

宮崎県高英研が「英語教育フォーラム2017」を初開催

プレゼンテーションコンテスト前日には、県教育研修センターを会場に、宮崎県高英研が初めて「英語教育フォーラム2017」を主催した。第1部の文部科学省初等中等教育局の平木裕視学官による基調講演に続き、第2部のパネルディスカッションでは、日南振徳高等学校の富高雅代指導教諭がコーディネーターを務め、県内各地区の英語科教員4名がパネリストとして実践発表をした。



Panelist

五ヶ瀬中等教育学校
石橋 貴子 先生

SGH（スーパーグローバルハイスクール）指定校として、総合的な学習の時間で取り組んでいる4つのテーマ（環境、経済格差、エネルギー、高齢化）に基づく研究や、海外でのフィールドワークなどの体験学習に取り組んでいます。英語の授業では、場面を設定したスキット練習や、エッセイライティングから派生するスピーチと評価、海外研修前に課すブックレポートなどを実践しています。



Panelist

宮崎北高等学校
林 友紀 先生

これまで、商業高等学校や進学校などで指導してきましたが、コミュニケーションな授業づくりの重要性を感じています。2017年度より着任した現任校では、ジグソー法による生徒主体の活動を取り入れており、スピーチやディスクリプション、外国のCMの内容をペアで描写するストーリーテリングなどを実践しています。また、本校では、即興型ディベートにも取り組んでいます。



Panelist

小林高等学校
佐藤 研一郎 先生

生徒の表現力が伸びていないことを目の当たりにして、指導法を変えました。生徒が「学んだ表現を使いたくなる」授業づくりに動んでいます。授業では、生徒がペアで質問し合い、相手の答えを受けたら、さらに理由を尋ねて説明し合うWhy Because Gameのほか、相手の言ったことを全てオウム返しする言語活動なども取り入れています。



Panelist

日南振徳高等学校
上村 卓也 先生

本校では、海外からのクルーズ船が来校した際に、生徒がガイド役となり、外国人観光客を英語で町案内するおもてなし活動や、外国人観光客対象のインバウンド研究調査、本校農学科の生産物の物品販売を行っています。また、Global Classmatesに参加して米国の高校生とのインターネットを通じた交流などを通じて、生徒が英語で考え、発信する力を高めています。また、相手国の生徒を本校生徒宅でのホームステイで受け入れ、本校の授業や実習に参加してもらい、交流しています。



Commentator

宮崎県教育委員会
山下 亮介 指導主事

県の英語科教員の実用英語技能検定（英検）準1級取得率は75.9%で、国の目標の62.2%をはるかに上回っています。また、研修協力校による授業公開と研修会、ALTの指導力等向上研修、小学校の教員向け研修、教育課程研究協議会を通じて、教員の指導力や英語力が向上する一方で、生徒の英語使用は全国平均に達していません。教員がチームで英語力向上を進めていく必要があります。



Commentator

文部科学省
平木 裕 視学官

全国的にも授業改善はまだ途上にあり、今春の入学生からが実際には勝負になります。小・中学校との連携を可能な限り進め、小学校の先生から授業づくりのヒントを得たり、入試を言い訳にせず、生徒の思考力・判断力・表現力を育み、即興でやり取りできる力を鍛えたりすることが重要です。学校教育の役割とは、子供たちが生涯にわたって学び続けるための基盤をつくることにあるのです。



1位 宮崎農業高等学校食品工学科
「おいしい微生物との出会い」



2位 妻高等学校福祉科
「福祉学び隊」



3位 宮崎海洋高等学校海洋科学科
「海洋生物は海の宝」

※「英語情報」専用アプリで動画が見られます。

「ABC 笠間プロジェクト」のもとで英語教育を推進

茨城県笠間市は、児童生徒の英語をツールとしたコミュニケーション能力の育成をめざし、2015年度より「ABC 笠間プロジェクト」（笠間市英語教育強化推進事業）を実施している。2018年2月に開催された「第3回 笠間市英語教育推進連絡協議会」は同事業の一環で、同市立笠間小学校での外国語活動の公開授業と、群馬大学の上原景子教授（同市英語教育アドバイザー）による指導講評、小学校外国語活動・外国語科の新教材を活用したワークショップが行われた。

英語で世界へ発信できる人材を育成するために

県内有数の観光都市である笠間市では、英語を用いて外国人や海外へ発信し、交流することのできる人材の育成をめざして、2015年度より「ABC 笠間プロジェクト」を展開している。この事業では、英語指導助手（AET）等の指導体制を拡充するほか、小学6年生・中学3年生への実用英語技能検定（英検）の公費助成や市内中・高等学校全生徒等への英検IBAの導入といった外部試験の活用、幼児の「英語遊び」から小中学生対象の夏季集中英語プログラムなどを通じて子供たちが英語に触れる機会の拡充、英語の授業改善のための「笠間市英語教育推進連絡協議会」の設置といった取り組みを行ってきた。

小中学生や教員の英語力は全国平均以上

こうしたさまざまな取り組みにより、児童生徒の英語力は伸びており、文部科学省が実施する2016年度の「英語教育実施状況調査」で公表された、全国や茨城県における中高生と英語科教員の英語力に対して、笠間市の児童生徒、教員の英語力が全国平均を上回るといった成果が出てきている。

笠間市では、「ABC 笠間プロジェクト」の一環として、小学6年生と中学3年生を対象に、英検の検定料を年1回助成しているが、2016年度に公費助成を受けた児童生徒は、小学6年生（5級以上）が134名、中学3年生（3級以上）が213名だった（小学6年生は400円、中学3年生は700円で受験可能）。

小中高を通じた英語教育強化推進事業
『ABC 笠間プロジェクト』

〈笠間市英語教育強化推進事業における目標指標〉

小学校卒業段階で英検5級、中学校卒業段階で英検3級を全児童・全生徒が受験、合格をめざす。

1

市AETの直接雇用とJET-ALTの活用による拡充

2

英語力向上検証のための英語検定試験への公費補助（小6・中3希望者）および英検IBA（市内全中学校と市内県立高等学校等）への導入

3

小学6年生・中学3年生対象の夏季英語プログラム（Intensive Summer English Program：通称ISEP）の開催
小中教員対象夏季英語教員セミナー（ブリティッシュカウンシルへ委託）の開催
※小中ともに夏季集中開催と2月にフォローアップセミナーの年間5日間

4

英語教育推進連絡協議会：小・中・高校の英語担当教員による公開授業および研究協議会（年3回）の開催
英語教育アドバイザーなどによる外部専門機関との連携

2016年度「英語教育実施状況調査」より

「英検3級程度」以上の中学3年生

笠間市	39.7%
全国平均	36.1%
県平均	35.0%

全国平均より3.6%、県平均よりも4.7%高い

2016年度「笠間市英語検定受験状況」より

実際に「英検3級」以上を取得した生徒数
※3級以上の公費助成による受験者数：213名

笠間市	23.3%
全国平均	18.1%
県平均	22.0%

全国平均より5.2%、県平均よりも1.3%高い。
全中学3年生の半数（51.0%）が3級以上を受験。

「英検準1級」以上の英語教員

笠間市	42.8%
全国平均	32.0%
県平均	24.7%

全国平均より10.8%、県平均よりも18.1%高い

小学6年生の公費受験助成対象者の合格率
※受験者数：134名

	合格率	前年比
5級	76.8%	13.5%増
4級	50.0%	14.3%増



授業改善や指導力向上につながる 「笠間市英語教育推進連絡協議会」

笠間市では市教育委員会が中心となって、児童生徒の英語力向上のための授業改善を進めてきた。年3回開催される「笠間市英語教育推進連絡協議会」は、小・中・高等学校の各段階における英語教育を円滑に接続させ、授業改善に向けた指導力向上を目的としている。

2017年度最終回の「第3回 笠間市英語教育推進連絡協議会」は、英語教育アドバイザーの群馬大学教育学部・上原景子教授を迎え、参加者の範囲を県内各市の教員や教育委員会関係者へと広げて2018年2月に開催した。

公開授業を行った同市立笠間小学校は市内で最も規模が大きく、市内の小学校外国語活動のモデル校だ。1年生から英語に触れる機会を設け、学級担任（HRT）と常駐するAET2名のチーム・ティーチングにより、1～4年生は月1回、5、6年生は週1回の外国語活動の授業を行う。HRTが授業を主導し、AETがサポートする体制を大切に、活動に応じた役割分担のもとで授業を進める。そうした授業づくりを支えるのは、中学校の英語科教員から転じた英語専科教員の庄司敏子先生、AETやAETコーディネーターだ。綿密な打ち合わせによって作成した授業計画に基づき、学級担任が望む教材をAETが

プレゼンテーションソフト等を使って作成するなど、AETと協力して授業をつくる体制が整っている。

授業は外国語活動専用の「フレンズルーム」で行う。教室内にはコミュニケーションを楽しむための約束ごと（BEST＝B：Big voice、E：Eye contact、S：Smile、T：Try my best!）や、文字を書く時の決まりごとなどが英語で貼り出され、子供たちが自然と英語を話したくなる雰囲気を生み出す工夫が施されている。また、電子黒板などのICT機器が設置されており、デジタル教材を提示して、音や絵を効果的に交えたフォニックスやチャンツなどの活動がスムーズにできる環境が整っている。

郷土を愛し、志高く、世界で活躍できる人を育てたい

笠間市では「世界で活躍できる人、地域を支える人づくり」をめざしたグローバル人材の育成に取り組んでいます。子供たちにはグローバルとローカルの視点を併せ持ち、外国人を英語でおもてなしできる力を身に付けてほしいものです。そこで本市では、英語教育と郷土教育、情報教育を柱として、さまざまな取り組みを進めてきました。

英語教育については、県内で唯一、AETを市内の小・中学校と義務教育学校の全校に配置しています。要望があれば、市内にある幼稚園や保育園、県立特別支援学校、県立高校にもAETを派遣して指導にあたるほか、AETによる市民向けの英語講座を実施したり、地域の祭りにも参加したりするなどしています。地域に溶け込んで活動することで、子供たちに身近な存在であってほしいと思います。また、夏休みには小中学生を5日間英語漬けにし、最終日に笠間市の良さを英語でプレゼンテーションさせるISEPという取り組みもあります。毎回、子供たちが創意工夫をした発表をしますが、コミュニケーション能力やプレゼンテーション能力を養う取り組みの1つです。

郷土教育の充実としては、2017年度から小学1年生から中学3年生まで9年間かけて学ぶ「笠間志学」を設けました。こちらでも学習の最終目標を、英語やICTと結び付けて、英語で笠間市の良さをプレゼンテーションすることとしています。

情報教育では、義務教育学校の「みなみ学園」を研究指定校とし、タブレットと電子黒板、無線LANを普通教室に整備しました。小学1年生からタブレットを使って発表するなど、活用は広がっています。新学習指導要領実施の2020年度までに全小学校へ、2021年度までに全中学校に導入できるよう、環境整備を進めていく予定です。

笠間市 今泉 寛 教育長



4年生

外国語活動

「友達のためのオリジナルピザを作り、紹介しよう!」

谷田部修先生 (HRT)、エイミー・ブラウン先生 (AET)

『Let's Try! 2』 Unit 7 「What do you want?」より



「英語が苦手なので、子供たちと一緒に学ぶ気持ちで臨んでいます」と語る谷田部先生。AETのエイミー・ブラウン先生と一緒に授業を進めた。

授業冒頭の帯活動は、あいさつに始まり、BESTの確認、エイミー先生がリードするフォニックス、既習表現を使ってペアで1分間会話を続けるチャレンジタイムとテンポよく進む。その後、メインのアクティビティで使う表現について絵カードを見ながら覚え、チャンツで繰り返し声に出し、ワークシート

を使ったリスニングで聞き取りながら、どのような場面で使われる表現なのかに慣れ親しんだ。

そうして十分に音声で慣れ親しんだところで、アクティビティに入る。“What do you want?” “I want ...” “Do you like ...?” “I like ...”の表現を使って、ペアで尋ね合い、オリジナルピザを作って名前を考える活動だ。谷田部先生とエイミー先生のデモンストレーションを見てから活動開始。お互いに好きな具材を尋ねながら、ワークシートに描かれたピ

ザの土台に、相手の好きな具材を貼っていく。ピザが完成したら、1人が“This is for you. This is ～ pizza! Here you are.”とピザを差し出し、もう1人は“Thank you. I like ham, sausages, ...”と受け取ったピザを見せながら、具材を紹介する。ペアでの活動が終わると、次はほかのペアに自分たちの作ったピザを紹介し合う活動へと展開した。

最後に振り返りシートに、自分ががんばったことや分かったことを書いて授業は終了した。



私は英語があまり得意ではないのですが、子供たちと一緒に英語を使うことを楽しみながら、授業を行っています。子供たちはこの1年間で、フォニックスで聞いたままの音をそのまま出せたり、単語が読めるようになったり、使える語彙が増えたりするなど、月1回の授業ながらも成果は出ているようです。子供たちにとっては、見たり聞いたり話したりしたこと全てが学びになっているのだと実感します。今日は活動が楽しかったようで、授業を終えて教室に戻ってからも、友達同士でピザを紹介し合う姿が見られました。もっと話したい、英語を使いたいという気持ちが芽生える授業づくりをしていきたいですね。私と同じように英語に苦手意識をもつ先生方もいらっしゃると思いますが、子供たちと英語を使うことを楽しむ気持ちで、ぜひ一緒にがんばっていきましょう!

指導講評 & ワークショップ

研究協議で授業づくりの課題を把握

公開授業終了後には、会場を笠間市地域交流センターへ移して、研究協議会が行われた。笠間市英語教育アドバイザーを務める上原景子教授は、この日の授業について、次のように指導助言した。

谷田部先生の授業については、「子供たちとのコミュニケーションもしっかり

り取れていて、日頃の学級経営がしっかりできていたことが分かります。子供たちが活動を理解できていないと感じたときに、一旦授業を止めて説明した場面もありましたが、まず席の近い子供同士で活動して慣れてから全体へ広げると、さらに良かったでしょう」とアドバイスを送った。

また、庄司先生の授業については「今

日は専科教員でなくHRTとして授業をしましたが、授業前のAETとの打ち合わせがしっかりできていたことが、2人のやり取りから見えて取れました。外国語科では文字を扱うことになりましたが、読むことや書くことは、聞いたり話したりして慣れ親しんでから取り組むことが原則です。子供は大人が思う以上に英語を書くことが難しいものです。書く活動

5年生

外国語科

「友達にインタビューをして『できること』を調査し、友達のよさを紹介し合おう!」

庄司敏子先生 (HRT)、ニール・ファニング先生 (AET)

『We Can! 1』 Unit 5 「She can run fast. He can jump high.」より



「子供たちが間違いを恐れずに英語を楽しみ、“できるようになった”と実感できる授業をつくりたい」と考える庄司先生。この日はニール・ファニング先生と一緒に、新教材『We Can! 1』を活用した外国語科の授業を提案した。

ジェスチャーを交えて、明るく元気な声で英語を話す庄司先生とニール先生につられるかのように、子供たちはにこやかに英語を使って活動する。随所で見られる子供たちへの声掛けや、ターゲットセンテンスを使って活動するカー

ドゲームなどは、英語教育推進リーダーの中央研修で学んだ成果だ。

この日は、“Can you ...?” “Yes. I can ..., but I can't ...” “No. I can't. ..., but I can ...”と自分のできること・できないことを伝え合い、友達の良いところを紹介することを目標とした。ニール先生が作成したインタビューシートには、ペアを組んだ相手の写真が貼ってある。子供たちは、相手に応じてHeかSheを4線に書き、相手から聞き取った「できること」を日本語や英語などで書き記し、

別のペアにシートを見せながら、自分のペアについて紹介する。第三者を介することで、三人称を使う目的・場面・状況を自然に理解できる活動だった。

授業終了時には、今日の授業で分かったことやできるようになったことを振り返りシートに記入し、数名の生徒が発表した。子供たちはお互いのできるようになったことを共有し、喜びを分かち合い、もっと話したいという意欲がかき立てられていた。



子供たちの話したい、書きたいという気持ちをいかに引き出すか。それには、「間違えても大丈夫」という安心して発話できる親和関係を築くことにあります。子供たちが英語を使っていろいろな活動をする時間をつくり、小さな成功体験を積み上げながら、意欲を引き出すようにしています。そのためには、教員が話す時間はできるだけ少なく、指示も分かりやすく出すことも忘れてはなりません。2018年度は移行期間に入り、週2回の授業になりますので、これまで以上に活動できる内容が増えると思います。中学校での指導経験や英語教育推進リーダー中央研修で学んだことも生かしながら、英語専科としてHRTとAETのパイプ役になり、あくまで児童主体の授業をつくっていくことを大切にしていきます。

は1文字ずつ認識させる時間を取ってから書かせるとういでしょう」と述べた。

その後は、「小中高を通じた外国語教育の在り方：新学習指導要領の実施に向けて」を演題に、上原教授による講演とワークショップが行われた。上原教授は、会場の参加者に問い掛けながら、新学習指導要領でめざす英語教育の方向性や現状の課題を説いたあ

と、移行期間に小学校で扱う題材、文字指導のあり方などを紹介した。そして、新教材を用いたワークショップでは、参加者同士でペアを組んで、“Do you like ...?” “I like ...”などの表現を使って活動するなど、実際の授業でどのように子供たちにコミュニケーションをさせるかがイメージできるような活動の提示となった。



小学校プログラム参加者 実践報告会を開催

「英語教員の英語力や指導力、資質向上」を目的として、公益財団法人 日本英語検定協会（英検協会）は2017年に17日間にわたり、オーストラリアのニューサウスウェールズ大学（UNSW）での英語教員海外研修を実施した。公募制により選抜されて参加した2017年度の小学校の外国語活動等の担当教員12名が、2018年3月、研修での学びを生かした帰国後の実践を報告し、情報交換をしようと自発的に集まった。 ※文中の肩書き等は取材当時のものです。

彦坂 悠仁 先生（愛知県 豊橋市立岩田小学校）



UNSWで学んだことを生かすために、Eliciting, Context Setting, Drillingを楽しく効率的に取り組める活動として、歌やチャンツを活用し、子供たちに英語劇に挑戦させた。歌やチャンツで覚えた表現は定着率が高いが、inputしたことが暗記になっているため、実際のコミュニケーションにどのようにつなげ、outputさせるかが課題。

柴山 香織 先生（千葉県 松戸市立常盤平第三小学校）



勤務校では担任主導で外国語活動の授業を進めている。担任をバックアップする松戸市の「日本人英語インストラクター」とチーム・ティーチングを行い、ALTから授業で使えるアクティビティを学ぶことで、担任の不安を払拭してきた。チャンツを活用した発音練習や掲示物の工夫などで、少しずつ成果が見え始めている。

西河 彩恵子 先生（滋賀県 東近江市立湖東第二小学校）



特別支援学級では、認知特性に適した指導や五感を働かせる経験的学習で、児童の英語力を養うことが可能であると考えている。研修後、ホスト先での集合写真を示し、英語を学ぶ理由を考えさせた。また、ALTとの会話時間を確保し、児童の自信と意欲を大切にしている。今後も特別支援学級における外国語活動の有効性を探りたい。

和志武 玲子 先生（大阪府 吹田市立桃山台小学校）



特例校として全学年で外国語に取り組み、授業スタイルも統一し、ALTとチーム・ティーチングを行っている。児童にリアルな体験をさせ、推測力やアクティブリスニングの姿勢を身に付けさせる授業を実践。学期に一度、職員研修を行っている。新教材を使って、どの職員も安心して授業に臨めるようにしていきたい。

藤原 久美子 先生（東京都 品川区立城南第二小学校）



品川区は小中一貫教育の構造改革特別区域として、小学1年生から「英語科」を実施し、9年間の一貫性のあるカリキュラムを編成している。『桃太郎』を使った学習で、きびだんごから派生して社会科の穀物の学習と関連付けるなどの工夫をした。児童の英語を聞く機会を増やし、話したいという気持ちを引き出せるようにしていきたい。

加良 幹宏 先生（神奈川県 横浜市長谷山小学校）



新学習指導要領を見据えて「書くこと」を実践し、中学年から工作やゲームを使って文字に慣れ親しませ、音と文字を結び付けてきた。高学年では、オーストラリアの授業で使用したレストランのメニューから食べたいメニューを選んで相手に伝え、注文票に書き写してもらうなど、コミュニケーションを意識した書く活動を取り入れた。

研修から帰国して半年間の実践を報告

英語教員海外研修は、小・中・高等学校の教員を対象としており、英検協会とオーストラリア大使館、UNSWによって編成したカリキュラムに基づいて実施される。カリキュラムは学習指導要領に沿った内容で、授業は全て英語で行われる。校種別プログラムと合同プログラムが組まれており、現地の小・中・高等学校を訪問して授業を見学する機会も用意されている。2017年度は7月末から8月中旬までの17日間の日程で実施され、滞在中は1人1家庭にホームステイをし、異文化交流・理解も深めた。研修最終日には、学んだ知識を踏

まえて作成した授業案による模擬授業を、グループごとに発表した。

今回の実践報告会は、帰国してから半年間が経ち、参加者たちが現場に戻ってどのような実践を重ねてきたのかを発表し、現時点での課題や改善策などを話し合う場を持ちたいと、参加者たちが自発的に集まった。指導助言者には、上智大学言語教育研究センター副センター長の藤田保教授を迎え、茨城県笠間市教育委員会の入之内昌徳指導主事、新潟市立新津第一中学校教頭の小林英男先生、北海道札幌国際情報高等学校の木村純一郎先生がアドバイザーを務めた。

研修での学びを学校や地域で広げ、

地域で活躍する存在に

実践報告のあとは、それぞれが抱える課題について話し合う時間も設けられた。なかでも、「教員同士の連携の難しさ」を課題に挙げる声が多かったが、それに対して、「ともに学び合う姿勢で接すると、先生同士でコミュニケーションが生まれる」「がんばっている人は誰かが助けてくれるし、その努力は伝わる」「一人で抱え込まずに、みんなで情報をシェアして、一緒に授業準備をするなど巻き込んでいくことが大切」「教材を共有して、誰もが同じように授業ができる環境を整える」といった、自身の経



田和 朋子 先生（京都府 大山崎町立第二大山崎小学校）



帰国後は、校内や地域で教員研修を開き、単元の見通しのもち方や授業の構成について、学びの成果を共有した。実際の授業では、コミュニケーションの目的を明確にし、買い物体験を通じて、子供たちが現実に近い表現を使って活動することができた。誰でも同じように授業ができる教材づくりの工夫や、準備の簡略化が課題。

森木 かずえ 先生（鹿児島県 十島村立恵石島小・中学校）



島を訪れた外国人観光客との交流や、海外から届いたクリスマスカードに書かれた内容を推測するなど、子供たちが英語に興味をもつきっかけがあった。ほかの離島の小学校とのテレビ会議システムによる合同授業では、Eliciting, Context Setting, Drillingを意識した活動を実践。「自然と、自然に、自然な英語に触れる」ことを大切にしている。

野田 潤一 先生（兵庫県 神戸市立福田小学校）



2年担任として、歌や絵本を活用して英語に慣れ親しみ、中学年へのつなぎを考えた授業づくりを進めてきた。図画工作科で描いた夏休みの思い出の絵を使って、友達の好きそうな色を聞き合ったり、英語で読み聞かせた絵本に出てくる動物に色を塗ったりした。日本語との違いに気付かせ、「英語って楽しい」と感じられる活動をしていきたい。

今西 佑 先生（東京都 狛江市立緑野小学校）



研修で学んだElicitingをふんだんに取り入れ、ALTと生活科の昔遊びをするために覚えた表現を使いながら積極的にコミュニケーションを取ったり、司書の先生と連携し、世界のデザートについて発音の違いに気付かせたり、調べ学習につなげたりした。学級担任だからできること、他教科との関連を意識し、場の設定を工夫した授業をつくっている。

勝間 伸恵 先生（岡山県 井原市立福倉小学校）

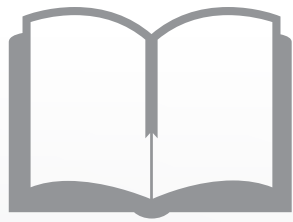


新学習指導要領への移行期間に入るにあたり、教務主任として、教員の外国語活動・外国語科へのハードルをいかに下げるかを念頭に置いて、教材の整備や授業の補助、校内研修などを進めてきた。今後は、年間指導計画の作成や授業時数の確保、教材・掲示物の作成、教員の英語力・指導力向上といった課題に取り組んでいきたい。

戸井 一宏 先生（広島県 広島市立戸坂城山小学校）



安心してコミュニケーションを楽しむ姿をめざし、研究を進めた。相手に聞き返す表現を用いて困難に対処する方法や、自作したリスニング教材を用いた指導が情意面や技能面に効果があることが分かった。成功体験と困難体験が動機付けに有効であることから、今後も児童自らが課題をもち学んでいく手立てを示していきたい。



『英語情報』オススメ本

英語教育に携わる皆さんにオススメの書籍をご紹介します。

今回は、『英語情報』にて連載の先生方の著書を2冊ご紹介し

ます。英語教育改革の動きを知り、明日からの授業づくりにお役立てください。

1 『全解説 英語革命 2020』

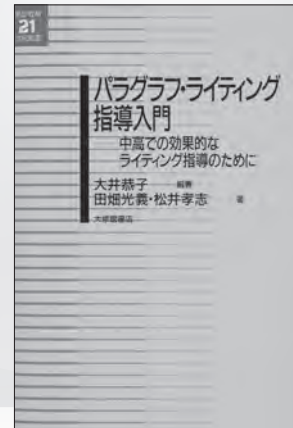
安河内 哲也（著）
文藝春秋 定価1,512円（税込） 2018年4月12日発行



「大学入試の英語は今後、どのように変わるのか？生徒たちはどのように学べばいいのか？」——2020年度から始まる大学入学共通テストでは、大学入試センターが作成するマークシート式の試験に加え、受験生は高校3年生の4月から12月までに実用英語技能検定など認定された民間の外部資格・検定試験を2回まで受験し、成績の良い方を志望大学に提出することになりました。これまでのセンター試験で測ってきたスキルは「読む」「聞く」の2技能でしたが、外部資格・検定試験では、「読む」「聞く」「書く」「話す」の4技能を世界標準で評価します。文部科学省の「英語教育の在り方に関する有識者会議」委員として、今回の英語教育改革や高大接続改革に大きく寄与してきた安河内先生が、「2020英語革命」の全てと、その学習法を徹底解説します！

2 『パラグラフ・ライティング指導入門 中高での効果的なライティング指導のために』

大井 恭子（編著）田畑 光義・松井 孝志（著）
大修館書店 定価2,160円（税込） 2008年8月20日発行



「パラグラフ・ライティングとは何か？」「どのようなステップを踏んで指導していけばよいのか？」といったライティング指導に関する疑問について、中学校や高等学校での指導法を解説し、さらに授業での実践例や典型的な誤答への指導例などを挙げて、英作文の指導法を丁寧に解説します。また、資料編では、全国の高등학교入試問題におけるライティング問題の傾向や公立高校の入試問題例と対策、国立大学や私立大学の入試における自由英作文への対策も収録。大学入学共通テストでの記述式問題、実用英語技能検定やTEAPなどのライティングテストに向けて、「パラグラフ・ライティング指導」の導入を考えている方には、まさに最適の入門書とも言える本です。

Present!

本コーナーでご紹介した書籍を読者の皆様へプレゼントいたします。

ご希望の書籍の番号と下記の必要事項をご記入のうえ、P.55のFAX申込用紙またはEメールにて、『英語情報』編集部までご応募ください。

- ① 氏名 ② 所属（勤務校名）・役職 ③ 連絡先（住所、電話番号、メールアドレス） ④ ご希望の書籍番号
⑤ 今号で興味深かった記事とその理由 ⑥ 今後、本誌で取り上げてほしい内容や意見

抽選で各1名様にご希望の書籍を差し上げます。皆様からのご応募をお待ちしております。

応募締切 **2018年7月14日（土）** 応募方法 03-5439-6879 eigojoho@morecolor.com

※当選者の発表は商品の発送をもって代えさせていただきます。応募時に記載していただいた個人情報 は、本件以外の目的には使用いたしません。

『英語情報』オススメ本プレゼント

FAX 申込用紙

プレゼント申込専用FAX 番号
『英語情報』編集部宛



03-5439-6879

P.54でご紹介した書籍のうち、ご希望の書籍の番号に○をして、下記の必要事項をご記入のうえ、FAXにて、『英語情報』編集部までご応募ください。

ご希望の書籍のいずれかに○印をご記入ください。

☐ 1 『全解説 英語革命 2020』	☐ 2 『パラグラフ・ライティング指導入門 中高での効果的なライティング指導のために』
--	--

氏名	(氏) フリガナ	(名) フリガナ
	様	
所属	勤務校名	役職
連絡先	住所 -	
	都 道 府 県	
	電話番号	

※当選者の発表は商品の発送をもって代えさせていただきます。応募時に記載していただいた個人情報は、本件以外の目的には使用いたしません。

1. 『英語情報 春号』で興味深かった記事は何ですか？ 該当するものの番号に○をつけてください。（複数回答可）

- | | |
|--------------------------|----------------------------|
| 1. NEWS&TOPICS | 9. TEAP Hot News |
| 2. 特集「新学習指導要領がめざす英語教育とは」 | 10. 英検ライティングテストを活用した発信力の育成 |
| 3. 特集事例 CLASS REPORT | 11. 英語教育セミナー in 東京 2017 |
| 4. 授業改善と評価のあり方 | 12. 特別記事 東京グローバル人材育成計画'20 |
| 5. 授業で使える「評価」のためのアイデア | 13. わが町の英語教育事情 宮崎県 |
| 6. 英語で授業7つの鉄則 特別編 | 14. わが町の英語教育事情 茨城県笠間市 |
| 7. 新学習指導要領に向けて（小・中・高） | 15. 英検 英語教員海外研修 帰国後の取り組み |
| 8. 高大接続改革ニュース | 16. 『英語情報』オススメ本 |

2. 上記の記事が興味深かった理由がありましたら、記事の番号とともにご記入ください。

3. 今後、本誌で取り上げてほしい内容やご意見がございましたらご自由にお書きください。



編集後記

新年度が始まりました。入学や進級、そして先生方はご異動などもあり、お忙しい時期ですね。新学習指導要領も、小・中学校では移行期間が始まり、高等学校では告示されました。また、高大接続改革も進み、大学入学共通テストの試行調査（プレテスト）も実施されています。英語教育をめぐる改革の波が押し寄せていますが、子供たちの可能性を信じて、チーム学校、チームJAPANで取り組んでいくことが大切ではないでしょうか。今号では、「新学習指導要領がめざす英語教育とは」を特集し、文部科学省初等中等教育局の平木裕視学官（取材当時）と下山田芳子教科調査官にお話を伺い、新学習指導要領に向けた研究実践を進めている学校へも取材に訪れました。『英語情報』も新年度を迎え、新たな連載がスタートしています。高大接続改革の動きや各地の英語教育の取り組みを取材した記事も充実させました。ぜひ、それぞれの記事をお読みになり、皆様のご意見・ご要望を編集部へお寄せください。

『英語情報』編集部一同

英語情報 2018 春号

2018年4月15日発行

発行 公益財団法人 日本英語検定協会
総務部 総務課
〒162-8055
東京都新宿区横寺町55

編集統括 株式会社モアカラー
アートディレクション・制作 株式会社モアカラー
印刷 日新印刷株式会社
製本 有限会社穴口製本所

©無断転載、複製を禁じます。
©2018 公益財団法人 日本英語検定協会

英検試験問題と解答のウェブサイト公開のご案内

公益財団法人 日本英語検定協会は、より広範な情報公開と、サービスの質的向上を図るべく、一次試験問題を英検ウェブサイトにて公開するサービスを行っております。**一次試験日から約1週間後に問題を提供いたします。**英検ウェブサイトのURLは、下記の通りです。

英検試験問題 <http://www.eiken.or.jp/eiken/exam/>

一次試験の「解答速報」は、毎回一次試験日の翌月曜日13時以降に英検ウェブサイトにて公開いたします。

英検解答速報 <http://www.eiken.or.jp/eiken/result/>

本誌について

お問い合わせ先 英検サービスセンター TEL 03-3266-8311

本誌は以下、英検ウェブサイトよりPDFにてダウンロードしていただくことが可能です。

<http://www.eiken.or.jp/eiken/group/>

お問い合わせ電話案内

電話番号はお間違えのないようお願いいたします。

- 英検申込受付に関すること
(出願、検定料など) **英検サービスセンター** (個人) **03-3266-8311**
- 英検受験に関すること
(受験票、会場、合格通知など) **英検サービスセンター** (団体) **03-3266-6581**

- 英検 Jr. に関すること **英検サービスセンター** (英検 Jr.) **03-3266-6463**

- 研究助成に関すること **英語教育研究センター** **03-3266-6706**

- BULATSに関すること **BULATS事務局** **03-3266-6366**

- IELTSに関すること **IELTS事務局** **03-3266-6852**

- TEAPに関すること **TEAP運営事務局** **03-3266-6556**

- 英検留学に関すること **英検留学情報センター** **03-3266-6839**

- 通信講座に関すること **通信教育課** **03-3266-6521**

- その他のお問い合わせ **英検サービスセンター** **03-3266-8311**

※全国の英語教育に関する研究会、セミナーなどのウェブへの情報掲載については、英検ウェブサイトのフォームよりお申し込みください。

教員向け

「英検検定料助成制度」

を利用して準1級を目指す!

準2級を取得して

あこがれの留学へ!

4技能入試に挑戦して

大学に合格!

2018年度 実用英語技能検定 試験日程

第1回検定

申込受付 **3/9金~5/11金** 協会必着
【書店締切：5/7日】

一次試験 **6/3日**
(筆記・リスニング)

準会場 すべての団体 **6/2日・3日**
中学・高校のみ **6/1日**

二次試験 (面接形式のスピーキング)
A日程 7/1日 B日程 7/8日

第2回検定

申込受付 **8/1水~9/14金** 協会必着
【書店締切：9/7日】

一次試験 **10/7日**
(筆記・リスニング)

準会場 すべての団体 **10/6日・7日**
中学・高校のみ **10/5日**

二次試験 (面接形式のスピーキング)
A日程 11/4日 B日程 11/11日

第3回検定

申込受付 **11/30金~12/26水** 協会必着
【書店締切：12/19日】

一次試験 ²⁰¹⁹ **1/27日**
(筆記・リスニング)

準会場 すべての団体 **1/26日・27日**
中学・高校のみ **1/25日**

二次試験 (面接形式のスピーキング)
²⁰¹⁹ **A日程 2/24日** ²⁰¹⁹ **B日程 3/3日**

※4級・5級のスピーキングテストの受験日は、申し込まれた各回次の一次試験合否開覧日から受験が可能です。各回次の二次試験日(1級~3級)から約1年間ご受験いただけます。詳しくは英検ウェブサイト内4級・5級スピーキングテスト特設サイト (<http://www.eiken.or.jp/eiken/exam/4s5s/>)をご覧ください。

英検

後援：文部科学省

4技能入試にも、海外留学にも、英語力向上にも、**新学期は「英検」でスタート!**

